２０１３年度　修士論文

災害復興における民族スポーツ

―新潟県山古志・小千谷地区の牛の角突きに着目して―

Ethnic sports in disaster recovery―

Focusing on the Bullfighting in Yamakoshi and Ojiya

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科

スポーツ科学専攻　スポーツ文化研究領域

5012A047-4

藤野　功

研究指導教員：　寒川　恒夫　教授

目次

第 1 章　序論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
　第 1 節　研究目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
　第 2 節　先行研究の検討・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

第 2 章　新潟二十村郷における牛の角突きの歴史的・文化的背景・・・・・9
　第 1 節　牛の角突きの慣習・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
　第 2 節　調査地概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
　第 3 節　角突きの史的変遷・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
　　第 1 項　角突きをめぐる娯楽と経済の論理・・・・・・・・・・・・・・・15
　　第 2 項　山古志と小千谷　―分節化した角突き―・・・・・・・・・・・17
　第 4 節　本章のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21

第 3 章　震災による角突きの変容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
　第 1 節　角突き牛における変容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
　第 2 節　闘牛場における変容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
　第 3 節　角突きをめぐる共同体の変容・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
　第 4 節　牛舎における変容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
　第 5 項　本章のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31

第 4 章　牛の角突き再開の意義・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33
　第 1 節　中越地震の概要と被災状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33
　第 2 節　角突きの復興過程・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34
　第 3 節　「復興のシンボル」としての角突き・・・・・・・・・・・・・・ 36
　第 4 節　担い手たちにおける角突き再開の意義・・・・・・・・・・・・・ 39
　第 5 節　本章のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 43

第 5 章　結論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 45
参考文献・URL・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 48
図・写真リスト・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 52

第１章　序論

第１節　研究目的

災害被災地域における復興過程において、その地域で伝承されてきた民族スポーツや祭事などが「復興のシンボル」とされることがある[1]。新潟県長岡市山古志地区、小千谷市東山地区では､新潟県中越地震からの復興において｢牛の角突き｣(以下､角突きと称する。)[2]という、牛同士を戦わせる闘牛行事がその役割を担い、震災の翌年には行事が再開されている。これまで文化人類学においては、災害後の被災地の状況をフィールドワークすることにより、そこから看守される問題を記述してきた。角突きにおいても、震災以前とはその形態を異にしながらも復活をしている動態が確認でき、角突きを再開させることに何らかの意義があったことが推測される。

そこで本研究においては、角突きを事例に、その社会的・文化的背景を踏まえた上で、災害という外的要因及び復興という特殊な環境下による変容を詳らかにし、被災後における当該行事の再開に与えられた意義を明らかにすることを目的とする。

第２節　先行研究の検討

民俗行事や民俗芸能、民族スポーツがどのように存続してきたかという問題は、文化人類学、スポーツ人類学、民俗学、地理学、社会学など様々な領域の分野から注目されており、その存続の仕組みや意義について多角的に考察されてきた。例えば、森田は、祭がその参加者の「アイデンティティ」形成を促すことを指摘し、それによって、地域の連帯感を高めることに貢献していることを明らかにしている[3]。また、遠城は、福岡で行われている「山笠」行事における、担い手の行事参加に対する意識に着目し、特定の住民だけが祭りの参加資格を得られることが､｢アイデンティティ｣を強化してきたことも指摘している[4]。

また、民俗行事が外部からのまなざしに触れることで「観光化」し、経済的な利潤の追求や、地域活性化に実用的な手段として利用されている動態にも関心が示されている。ここでいう行事が「観光化」するということは、E・M・ブルーナーが指摘したような「観光客のためのパフォーマンスは、その土地の歴史を含んでおり、時間がたつにつれて変化し、そして観衆に受け、売り込めるように特化した形で構築される」[5]こととして理解する。そして橋本は､｢壬生の花田植」という行事を取り上げ、民俗芸能の担い手たちが、このような｢観光化｣をも民俗芸能を｢生産/再生産｣する資源として主体的に利用しながら、

自己の存在理由を獲得していると評価している[6]。さらに、山下は、このような外部からの視線を受けて、行事がより「神聖性」や「伝統性」を強調され、再創造されることを指摘している[7]。本研究で扱う「牛の角突き」もこの典型例であるといえる。つまり、角突きにおける「伝統」とは、E・ホブズボウムが提唱した「実際に創り出され、構築され、形式的に制度化された『伝統』」、いわゆる「創られた伝統」[8]であるという理解の下、本研究を進めていくことにする。

日本における民俗行事において「観光」や「伝統」が再認識され始める傾向は、いわゆる「おまつり法」(「地域伝統芸能等を活用した行事の実施による観光及び特定地域商工業の振興に関する法律」[(平成四年六月二十六日法律第八十八号)])の制定を機に拍車がかかり、民俗行事が現代に求められている姿に変容しつつ、時に文化財指定という後押しも獲得しながら[9]、存続してきたのである。

しかし、すべての行事がこれらのように存続意義を見出され、その継承に成功しているわけではない。木内は、北海道で伝承されていた「盤持大会」という民族スポーツを事例にして、行事を伝承してきた共同体の構造が、生業の変化に伴って変容し、その結果、担い手たちが行事の存続を諦めざるを得なかったという動態を報告している[10]。このように、近年では民俗行事や、民族スポーツの在り方が、担い手たちの意識や生活の変化に対応して変容していくことが認識され、その動態の中での行事存続の要因や意義が「アイデンティティ」や「伝統」、「観光」といった概念の中で理解されてきた。本研究の対象である闘牛行事に関する先行研究においては、その歴史的変遷や、闘牛に関する習俗をまとめたもの、あるいは現況紹介に留まるものが大半であるが[11]、このような現代的な問題に焦点を当てた研究もいくつかみられる。ここでは南予地方の闘牛を事例とした石川の先行研究と、本研究の対象である中越地方の闘牛を対象にした、渡邉、菅による 2 つの先行研究を取り上げる。

(1) 石川菜央「宇和島地方における闘牛の存続要因 : 伝統行事の担い手に注目して」[12]

石川はこの研究において、愛媛県宇和島の闘牛の史的変遷に着目し、その存続要因の解明を試みている。彼女の研究によると、宇和島の闘牛における存続要因は 3 つの要因があるという。一つ目が担い手の生業、特に農業における牛の必要性である。農作業における人と牛との密接な関係が、闘牛が盛んに行われる土台になったとしている。しかし、これは農業の機械化とともに、存続要因としての役割を果たさなくなり、これを代替する形として登場したのが、二つ目の「観光化」だとしている。行事が「観光化」したことにより、行政からの支援を引き出すことに成功しただけではなく、闘牛を制度的に支える運営組織を成立させた点において、存続に対する効果が大きかったと指摘している。また、彼女は

担い手間で育まれる人間関係に着目し、この、闘牛を通じた個人同士の人間関係の強化・生産が、三つ目の存続要因であると結論付けている。

この、宇和島の闘牛における存続要因の考察は、行事の「観光化」や、担い手同士の関係性に着目している点において、中越地方の闘牛行事における再開意義を明らかにしてく上で、重要な視点を与えてくれる。しかし、この研究では担い手たちにとっての行事存続の意義が議論されないままに終わっている。

(2) 渡邉敬逸「『文化』と『経済』のあいだに―牛の角突きの近現代」[13]

彼は、二十村郷の近現代における角突きが消滅と再開を繰り返していることに着目し、その動態が「経済」と「文化」の論理によって引き起こされていることを明らかにした。さらに、二十村郷の角突きが山古志と小千谷という 2 つの角突きに分節化したことについても言及しているが、その理由や分節化後の角突きの動態については述べられていない。また、現在の角突きは「文化」とも「経済」とも異なる「二十村郷の担い手の論理」にも支えられていると指摘しているが、それが具体的に何であるのかもこの研究では示されずに終わっている。筆者が明らかにしたいことは、震災後における、この「担い手の論理」である。そして、この「経済」と「文化」の論理によって、角突きが消滅と再開を繰り返しているという指摘は、震災後における再開意義と、角突きの歴史的な変遷との関連性をみる上で重要な知見であると考えられる。そのため、第 2 章において、この渡邉の先行研究を参考にしながら、筆者による聞き取りを加え、もう一度角突きの史的変遷を整理することにする。

(3) 菅豊『「新しい野の学問」の時代へ―知識生産と社会実践をつなぐために』[14]

菅は、震災の前年である 2003 年から小千谷の角突きのフィールドワークを始め、自らも角突き牛を所有するなど、担い手たちと深い関係性を築いている研究者である。

本書は 3 部構成になっており、第 1 部において角突きに関連した記述がある。これは、彼の私的経験を、他者が自らの存在と行いを対照するための共有知とするために、彼の自己言及を含んだオートエスノグラフィーとして表現されている。よって、ここから客観的な角突きの知見を抽出することは難しいが、彼の震災後の小千谷において経験したことを通じた語りは、小千谷の担い手たちの動向を知る上で貴重な資料といえるだろう。具体的には、小千谷の担い手たちが震災直後から角突きの復活を志向していたこと、小千谷における共同牛舎建設において、担い手たちの中に葛藤があったこと、彼らが自ら角突きを「シンボル化」していったことなどが描かれている。これらの知見を参考にしながら、第 4 章では被災下における角突きの動態を述べていく。

以上の先行研究を踏まえると、本研究の独創性は、①担い手たちにとっての闘牛行事存続の意義を明らかにすること②それを震災からの復興下という状況において考察すること③震災による闘牛行事の変容を扱うことの以上 3 点に求めることができる。

次に、災害における文化人類学的な研究について、先行研究の検討を行っていく。

これまでの災害研究の蓄積は、社会学や地理学、文化人類学など諸分野にわたって行われてきたが、特に文化人類学における災害研究は、1980 年代から始まる。そこでは、自然偶発的な「不幸」の発生を政治的社会的に解釈する災因論、環境の急激な変化への適応をテーマとする生態人類学、災害の被害に遭いやすい地域の開発行政にかかわる開発人類学などの分野で研究が進められてきた。木村によると、「災害を持続的な日常性という文脈のなかで捉えようとしてきた」ことが特徴であるという[15]。

これらの諸研究の多くは、災害に対してどのような社会的な要件が、災害のリスクを高めるのかということを、「脆弱性」という尺度で理解し、被害を受けやすい人、または、地域の「脆弱性」を再生産する、社会文化的な仕組みを明らかにすることを目的とした。つまり、防災という観点が念頭に置かれており、この時にはまだ被災地域に伝承される伝統行事の復興過程における変容や、民俗文化財の動態などへの関心が示されることはなかったのである。

1990 年代に入ると、被災者寄りの視線を持ち、かつフィールドワークという調査法の特性を生かした長期的なタイムスパンの研究が増えてくる[16]。A.Oliver-smith は、ペルーにおける大震災の調査を通じて、地域住民の被災地における生活状況やその苦闘を詳細に記述し、災害研究は、人間と環境との関係性や社会・文化変容に関する人類学的理論構築へ寄与すると主張している[17]。

日本における災害研究は、1995年の阪神淡路大震災以降に盛んになったが、社会学、特にコミュニティ論を中心とした議論が多い。大矢根は阪神淡路大震災からの復興過程において、被災者の生活再建が、行政による復興都市計画事業の進捗状況でしか語られていないことへの不信感があることを明らかにし、住み戻ってきた被災者が、各種自治会活動、地域行事の再興を通して、地域アイデンティティを紡ぎ出していく過程を記述している[18]。災害と民俗行事の関連に目が向けられたのは、2011年に発生した東日本大震災以降である。この地震の主な被災地である東北地方には、数多くの民俗行事が伝承されており、その被災と再開にあたって、どのように伝統文化を守り抜いていくのか、また、無形の民俗文化財の復興は地域社会に何をもたらすのか、という機能が関心の対象になり、いくつかの調査が行われている。林は『季刊民族学』[19]138（秋）号において、大船渡市、南三陸町の

鹿踊りを事例にし、盆や供養の際に踊られていた鹿踊りを再開させることは、慣れ親しんだ伝統にのっとって死者の鎮魂をおこなうことにより、日常性を回復させることであったと報告している[20]。また、岡田は「民俗芸能と祭礼からみた地域復興　東日本大震災にともなう被災した無形の民俗文化財調査から」というシンポジウムでの発表において、「大曲浜獅子舞」という行事が、震災からの復興において、メディアや外部の組織やボランティアを利用しながら、被災の困難を乗り越えて復活し「復興のシンボル」として認識されていることを明らかにしている[21]。

このように、徐々に震災復興下における民俗行事の動態に関心が示されるようになってきたが、これらの研究結果は論文としては纏められず、簡単な調査報告の形式に留まっている。また、これらの研究は、東日本大震災の発生直後における民俗行事の動態や機能に着目しており、震災前後における行事の変容や、行事の再開意義には言及していない。

これらの研究を踏まえると、本研究において、震災からの復興下における、角突きの担い手たちが持つ行事の再開意義と行事に関する変容を明らかにすることは、災害における文化人類学研究においても、オリジナリティを持つものであると考えられる。また、災害からの復興という特殊な環境が、担い手たちが行事を再解釈する契機を与えているとすれば、文化人類学的な視座において、震災と民俗行事との関連性が考察されていくことの重要性を示すことができると考えられる。

1　東日本大震災からの復興に際しては、福島県の「相馬野馬追」や、東北六県の伝統行事が一堂に会して行われる「東北六魂祭」などの行事が復興のシンボルとみなされ、多くのメディアで取り上げられた。

2　日本においておこなわれている闘牛は岩手県久慈市、島根県隠岐、愛媛県南予地域、鹿児島県徳之島、沖縄県（本島、石垣島、与那国島）、そして本研究の対象である新潟県中越地方の６ヵ所に現存している。その名称は沖縄においては牛オーラセー、徳之島においては牛オーシ、南予地域では闘牛、隠岐では角突きなどそれぞれ伝統的な呼称が存在し、本研究の対象である、中越地方では「牛の角突き」と呼ばれる。

3　森田 1990

4　遠城 1992

5　E・M・ブルーナー 2007

6　橋本 1996

7　山下 1999

8　E・ホブズボウム 1992

9　中村は、「松会」という伝統行事が文化財指定を受けたことにより、より本来の「伝統的」な形式に近い形で伝承が行われるようになったことを明らかにしている。

10　木内 2010

11　愛媛県教育委員会文化財保護課[2000]や、二十村郷牛の角突きの習俗保存会[1982]な

どが、当該地域の闘牛に関する習俗について資料を記録している。また、複数の地域を調査対象としたものとして、新潟の「牛の角突き」と隠岐の「牛突き」を比較した、広井の研究[1999]などが挙げられる。

[12] 石川 2004

[13] 渡邉 2009

[14] 菅 2013

[15] 木村 2005,p.400

[16] ibid.

[17] A.Oliver-smith 1996

[18] 大矢根 2011

[19] 『季刊民族学』は、教養ある市民の家庭に世界の諸民族の社会と文化に関する正確な情報を、学術研究の成果にもとづきつつ、平易で興味ぶかい表現で提供しようとする旨のものであり〔国立民族博物館　友の会 HP 参照〕、林の報告も、自身が参加する「愛 deer プロジェクト」の活動内容の説明を中心とした、簡単な調査報告に終わっている。

[20] 林 2011

[21] 東北大学東北アジア研究センターシンポジウム「民俗芸能と祭礼からみた地域復興　東日本大震災にともなう被災した無形の民俗文化財調査から」における発表資料を参考にした。

第 2 章　新潟二十村郷における牛の角突きの歴史的・文化的背景

本章において、本研究の対象である角突きが震災以前にどのような文化的文脈で行われてきたのかということを明らかにする。まず、農村娯楽に神事性が付随することで、複合的な文化として継承されているとされる角突きが、現在ではどのような慣習に則って行われているかを概観した後、この習俗を育んだ二十村郷について、その特殊な環境を地理的特性や歴史、産業構造に着目し考察する。そして、消滅と再開を繰り返しながら、行事存続の正当性を確保してきた角突きの史的変遷を整理した上で、その存続要因となったものについて検証を進めていく。

本章における議論は、震災後における角突き再開の意義がどのような文脈に見いだされるかという議論と関連性を持つものといえる。

第 1 節　牛の角突きの慣習

牛の角突きとは、新潟県二十村郷(現長岡市山古志地区、小千谷市東山地区)に伝わる牛と牛が争う闘牛である。スペインやメキシコなどの諸外国では牛と人間が戦うという形式の闘牛が盛んであるが、中国や韓国をはじめとする東アジア地域においては、牛と牛とを戦わせる形式の闘牛が行われている[22]。日本において行われる闘牛もすべてこの形式である。石川は、宇和島の闘牛が、農村における農閑期の娯楽として始まったと指摘しているが[23]、二十村郷における角突きの歴史や起源については、はっきりとした記録が残されていない。言説としては 1000 年続いている伝統だというものもあるが、それを証明する根拠は存在しない。角突きが初めて文書に表れる最古の資料は、名古屋の明倫堂が寛政 7 年（1795 年）に刊行した『垂穂録』であり、広井によると、ここに、毎年 3 月に牛を東西に分けて、相撲のごとく互いに戦わせたという旨の記述が確認できるとしている[24]。また文化 11 年（1814 年）に曲亭馬琴によって刊行された『南総里見八犬伝』にも角突きに関する記述が残っている。龍と牛の間にできた鱗のような体毛を持った牛「須本太」が暴れ出したところを、八剣士の一人で怪力の持ち主であった「小文吾」が角をつかみ静止させるという、事実とは考えにくいが筋書きが伝わっている。しかし、このような角突きの様子については越後湯沢の文人である鈴木牧之が直接取材し、その情報を馬琴に提供したものであることが明らかになっており[25]、両文献から江戸時代中期には確実に角突きが行われていたと考えられる。これらの歴史的資料が決め手となって昭和 53 年には国の重要無形民俗文化財に指定されている。これについては本章の第 3 節で詳しく後述する。

角突きの起源については農閑期の娯楽として始まったとする説を取るものが多いが、そ

の他諸説あり特定されていない。広井によれば、山古志地区にはアイヌに起源をもつ人々が暮らしており、祭の際に牛に角突きをさせ、負けた方を食べるというアイヌ文化の遺風だという説や、二十村郷の先祖は中国大陸の満州地方からやってきたのであり、大陸に闘牛の習俗があったため、日本に移り住んだ後も闘牛を開催したという説などもある[26]。いずれの説にしても確固たる論拠があるわけではなく、その起源に関しては自由な解釈がなされている。

この角突きは、もともと「二十村郷牛の角突き習俗保存会」(略称は越後闘牛会。以下本文では略称である越後闘牛会を使用する)が管轄し、二十村郷という地域全体の習俗として存在していたが、現在では山古志と小千谷という 2 つの地域単位に分節化し、それぞれ「山古志闘牛会」と「小千谷闘牛振興協議会」という統括組織が運営している[27]。

次に、現在行われている角突きの内容について述べていく。角突きは毎年 5 月から 11 月にかけて行われ、月に 1 回から 3 回程度の頻度で開催される本場所大会と、観光客の要望により臨時で行われる観光闘牛、そして祭礼として年に 1 回行われる角突きの 3 種類に分類される。なお、本場所大会と観光大会は観客から入場料を徴収し、興行として行われているが、牛の維持管理に大きな資金が必要なため、担い手個人で見ると赤字という状況である。

それぞれ場所の 4、5 日前には、「取組審議会」にて「ワリ（取組)」の組み合わせが決められる。この会議は牛のオーナーである「牛持ち」が集まり、角突き牛の四股名が書かれた木札を並べながら行われるのであるが、なんとか自分の牛が有利な状況で戦えるワリを組みたいという牛持ちたちの思惑、牛持ち同士の人間関係や血縁関係、そして、現在では観客に楽しんでもらえるようなワリを組むという意識などが交錯し、長丁場になることが多い。実際に筆者が見学した取組審議会でも、2 時間以上の話し合いが行われ、牛持ち同士がお互いに提案と譲歩を繰り返しながら合意形成を図っていた。この取組審議会を経て、ワリが決定した後に角突きの当日を迎える。

大会当日には、まず牛の持ち主である牛持ちと「勢子」が土俵内に集まりワリの読み上げが始まる。勢子とは角突きの際に角突き牛の周りを囲み、「ヨシター」という掛け声や、時には牛の体を叩きながら闘争心を煽る役割を担う人のことを指し、慣習的に牛持ちと同集落、または血縁筋の若者達が担う。また、後述するが二十村郷の角突きは必ず引き分けで終わらせる慣習があり、その際の重要な役割を担っている。この勢子と牛持ちの両者で取組の最終確認が行われ、全員が承認を意味する手締め拍手を行うと最終決定となり取組の撤回は効かなくなる。これはワリが当日その場で決められていた形式の名残である。これが済むと、土俵に塩と酒を撒いて清め、残った酒を関係者で回し飲みをする。その間，出番を控えたたまり場[28]の陣営は牛の尾から頭の方に向けてお神酒をかけ、角突きの勝利

と安全を祈願する「出陣祝い」という儀式を行う。

「出場祝い」が終わると、杭や立木に結んでおいた「曳き綱」を解き放ち、「牛曳き」に引かれた牛を先頭に、勢子達がこれに続いて角突き場へと向かう。いわゆる「土俵入り」である。牛曳きは土俵入りの際に角突き場の入り口から駆け足に場内に入り、曳き綱を地面につけずに牛を場内に曳き入れ、これを曳き回す役割を担っているが、これは牛持ち自身がやる場合と勢子の内の若い者に任せる場合がある。入場した牛は、吠えたり、「まま掘り」と呼ばれる前肢で地面を掻いたりする示威行動を行う。もう一方の牛も土俵入りを済ませたら、お互いに牛の「鼻綱」を持って土俵の中央に牛を近づけていく。両牛が接近し、呼吸が合ったところで同時に鼻綱を抜き取る。鼻綱を抜かれた牛は勢いよく相手に向かっていく場合もあれば、若い牛同士であると互いに見合ったまま角突きを始めない場合もある。観客の多くもこれをわかっており、だんだんと年月を重ねるごとに角突き牛として成熟し、立派に角突きをするようになっていく過程を楽しむのである。

写真１　角突きの様子

角突きが始まると、勢子が「ヨシター」という掛け声とともに牛を激励する。上手い勢子は「声で牛を動かす」といわれ、絶妙なタイミングで声を出し、牛を加勢づける。勢子の声に威勢づけられた牛は、「カケ」や「ハタキ」[29]といった技を出しながら相手の牛に攻め込んでいく。その様子を観客に分かりやすく説明する解説者も存在する。小千谷の角突きでは、闘牛場の一角に設置された小屋にベテランの解説者がおり、特徴のある口調で取組を実況する。この解説者がいつ頃から解説を行っているかという詳しい時期は不明であるが、少なくとも 20 年以上は解説を務めている、いわゆる名物解説者といわれる人物であり、彼の解説を楽しみに角突きを観戦しにくる客も多いという。一方山古志では、勢子の一人がピンマイクを付けて土俵の中で勢子としての役割も担いつつ臨場感のある解説をしていた。

両牛共に力を出し合い取組も佳境に入ってくると、観客席からも「分けれやー！」との声が聞こえてくるようになり、勢子たちが「引分」の作業に入る。前述したように二十村郷の角突きは両牛に勝ち負けをつけず、人力で対戦中の両牛を引き離し、これを「引分」とする点にその特徴がある。中には一般観戦者にも牛の優劣がわかるような取組もあるものの、同じような実力の牛同士でワリが組まれるため、一見したところでどちらが勝った

かはわからないような角突きが大半である。しかし、角突き関係者、または目の肥えた観戦者に聞き取りを行うと、彼らは漠然とながらもどちらの牛が勝っていたかということが判別でき、角突き牛の実力、そしてその序列が明示的にはされないながらも共通認識として形成されていくと語っており、共通のコミュニティ内で角突きの楽しみ方というものが醸成されていくことが分かる。

引分で取組を終わらせることに関しては、いくつかの理由が語られており、主なものは以下の通りである。

①角突き牛は家族同然の存在であり、我が子のように可愛がっている牛が深い傷を負うまでの死闘を見たくはないため。
②勝負付けを行うまで徹底的に角突きをさせると､負けた方の牛が戦意を喪失してしまい、今後角突きができなくなってしまう。両牛ともに満足感や勝利感を味わわせておき、徐々に強い牛へと成長させていくため。
③牛を新しく導入するには大きな資金が必要であるため、牛の犠牲を少なくし、長く保有できるようにするため。
④取り組みを引き分けで終わらせることによって賭事が成立しなくなり、健全な娯楽として楽しめるようにするため。

以上が主な理由であり、文献やインフォーマントによって強調される理由が変わってくることが特徴である。

引分のタイミングは「勢子長」と呼ばれる勢子の責任者によって決められる。勢子長が片手を挙げ合図を送れば、勢子たちが一斉に動き出す。まず、両陣営の「綱かけ」と呼ばれる勢子が「足掛け綱」を掲げて綱かけの合図を出し、角突き牛の背後に回り込む。そして、公平を期すためにお互い相手方の牛の片側の後肢に同時に綱かけをする。 その後、綱かけが伸ばした足掛け綱を多くの 「綱ひき」と呼ばれる勢子たちで引っ張り、牛の動きを止める。片足を取られ水平に上げて引っ張られながらも、相手に向かおうとする牛は「綱意地が良い」と形容され､その勇猛さを賞賛されることが多い[30]。これと同時に「鼻とり」と呼ばれる勢子が牛の鼻の穴に指を差し込んで牛の顔を上げる。鼻の穴は牛の急所であるため、ここを捉まれると興奮していた牛が一気に大人しくなるのである。両牛の鼻が取られた時点で取組が終了する。この一連の作業は非常に危険性が高く、大怪我を負った勢子も少なくない。そのため、この一瞬は会場にも緊張感が走り、うまく牛を引き離した際には観客も大きな歓声を向ける。牛と牛が戦う角突きであるが、その最後を飾る人と牛との勝負が取組のハイライトと言っても過言ではないだろう。取組が終わると、両牛共に場内

を曳きまわされ観衆から大きな歓声を浴びることになる。飼い主の最も晴れやかな瞬間であり、自らの牛を再度観衆に披露する名誉の時間でもある[31]。この際の曳き役は牛持ち自身が担うことが多いが、中には自分の子息や友人などに役を譲る例も散見された。

以上が現在行われている牛の角突きに関する主な慣習である。次節ではこの角突きを守り受け継いできた二十村郷という地域単位について概要を示した後、その文化的特徴を、地理的条件や、歴史的な産業構造の転換などの社会構造を踏まえながら考察していくことにする。

第2節　調査地概要

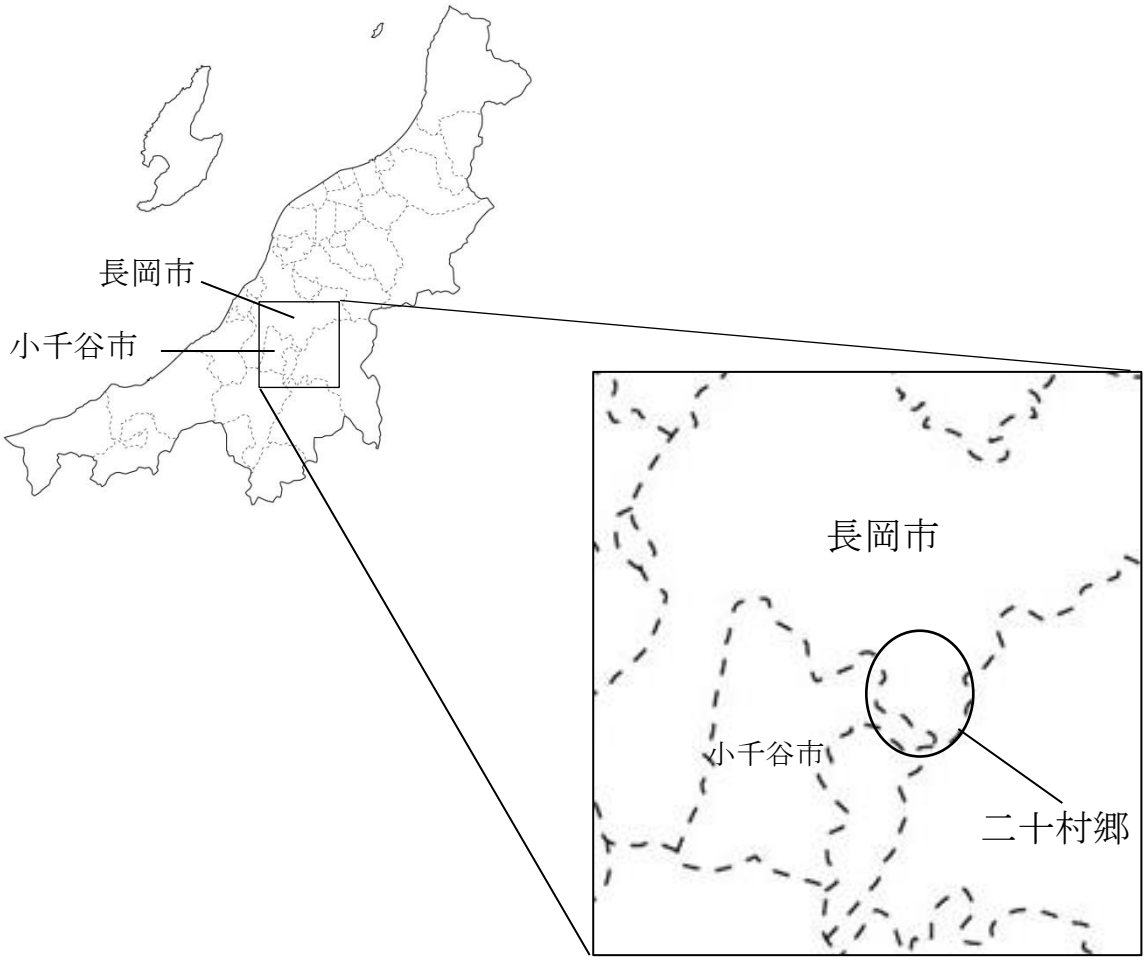

図1　二十村郷の地図

本研究の調査対象である新潟県二十村郷とは、新潟県古志郡山古志村（現在の新潟県長岡市山古志地区）とその周辺の小千谷市東山地区・北魚沼郡広神村（現在の新潟県魚沼市の一部）・川口町・栃尾市の一部にまたがる地域に当たる。200m から 600m の山々が重なり合う地形をしているため、まとまった広い土地はほとんどないながらも、その間隙に「二十村郷」の由来でもある二十前後の小集落が点在していた。山腹には多くの棚田が残されており、日本の原風景とも称されている。また近年では、上越新幹線、関越自動車道、北陸自動車道の高速交通インフラが整備されており、その利便性を活かして自動車部品、電子部品などの製造業の事業所も立地するようになった。そのため、住民たちの生業は、かつては農業と畜産、そして養鯉業が中心であったが、現在では多様化しつつある。この二十村郷は、明治以降何回もの分離や合併によって、現在では複数の自治体の行政区画にまたがった地域となっているが、これらの集落の歴史・習俗などは共通性を多く持っており、その中に牛の角突きも同じく共通してみられる。角突き以外の共通する習俗としては錦鯉の養殖が挙げられる。東によると、錦鯉は二十村郷が発祥の地であり[32]、観賞魚としていまや国内のみならず世界各国で大変な人気を集めている。それを支える養殖生産はその経済的な価値に加えて、きわめて文化的価値の高い伝統産業として地域活性化にも貢献している。

これらのような共通の習俗を育んできた背景には、この地域に共通した厳しい自然環境が存在すると考えられる。二十村郷は、山間地ゆえの隔絶性と狭小な耕地、地滑りが発生しやすい地形・地質による地滑り災害などにより、山地帯でありながら山の有効利用が難しい土地柄である。渡邉は、この二十村郷の環境を踏まえ、「地域社会の在り方を制約され続けてきた」と指摘している[33]。担い手たちからの聞き取りにおいても、満足な耕地を確保できなかったため、困窮をいくつもの生業を組み合わせながら凌ぎ、錦鯉という副業を生み出した。そして、山の斜面を棚田に変え、その勾配での使役に牛を利用し、その牛たちに角突きを覚えさせたと語られる。

また、この地域の厳しい環境の代表として、日本海側特有の重く湿った豪雪がある。この地域は世界有数の豪雪地帯であり、冬を迎えると雪に閉じ込められ、村々はほとんど孤立状態になった。また、雪のない季節であっても、谷間に点在する集落間の移動は、山越えがあり容易ではない。このことは、病人が出た場合など緊急を要する時に障害となる。そこで、昭和のはじめ頃から、集落と集落を結ぶ手堀りのトンネルが掘られるようになった。昭和 7 年(1932 年)に東竹沢の梶金と木篭を結ぶ七曲トンネル、同 9 年(1934 年)に東竹沢と竹沢を結ぶ梶金トンネル、同 24 年(1949 年)に広神村に通ずる中山トンネル、そして同 27 年(1952 年)には南平地区と竹沢を結ぶ羽黒トンネルが開通した[34]。これらのトンネルはツルハシを使って掘られた手掘りのトンネルである。現在ではそのほとんどはコン

クリート製の新しいトンネルに代わられているが、中山トンネルは当時の姿のまま保存されており、この地方の生活史をものがたる貴重な文化的遺産となっている[35]。

しかし、このような村民の努力を持ってしても、昭和 38 年には豪雪のために道が完全に遮断され、ヘリコプターによる物資輸送によって村民の生活を確保するような事態も発生している[36]。それだけ厳しい環境の中で二十村郷の人々は生活をしてきたのである。そして、市街地への道路網が整備され、生活のあり方が大きく変化した現代にあっても、二十村郷を巡る困難な状況は大きく変化していない。日本の典型的な中山間地域の例に漏れず、現在の二十村郷は人口流出に伴う過疎化、脆弱な社会的基盤、不安定な産業構造という個々の住民たちの努力では解決しがたい問題を内在させている。この山積した問題が改めて顕在化したのが平成 16 年（2004）に発生した中越地震である[37]。この中越地震については第 4 章で詳しく述べる。

以上が本研究の対象である二十村郷の概要である。次項では、このような厳しい環境の中でどのような文脈で角突きが守り受け継がれてきたのかということを明らかにしていく。そのために、角突きは娯楽であるという観点と、その娯楽である角突きの周辺を取り巻く経済の論理に注目しながら、史的変遷を概観していく。

第 3 節　角突きの史的変遷

この節において、角突きの史的変遷を、第 1 章にて言及した渡邉による先行研究や、行政機関発行の資料に筆者による聞き取りの結果を加え、整理していく。

第 1 項　角突きをめぐる娯楽と経済の論理

現代における角突きは守るべき伝統文化として、または地域活性化としての観光資源、そして、震災後には復興のシンボルとして位置づけられているが、その根底にあるのは二十村郷という厳しい環境を持つ地域の中で、その苦しさを一時的に解放するための娯楽であったということである。広井によると、角突きは彼岸、棚払い、盆、十五夜などの生活の節目に併せて行われ、開催の度に郷内の老若男女が各集落から大挙して集まり、牛と人とが織りなす妙技に歓声を挙げたという[38]。渡邉は、牛の角突きは普段の重苦しい生活を一時忘れられる数少ない娯楽の場として、または娯楽以上の特別な意味を持ったハレの場として今日まで続けられてきたと指摘している[39]。これを裏付けるように、山古志の虫亀集落に住む勢子の一人は「山古志には角突きぐらいしか娯楽が無い。」と語り、70 代の牛持ちは少年時代を回想して「友達と小遣い握りしめて角突き場（闘牛場）に行って、リン

ゴ飴を買うことが唯一の楽しみだった。」と述べる。このように、角突きはその直接的な関係者はもちろん、二十村郷に住む住民全体の娯楽の場、親睦を深める場として機能してきたと考えられる。そして、この娯楽として楽しまれてきた角突きには、二十村郷を巡る経済の論理や、行政による風俗統制によって、消滅と再開を繰り返してきた歴史が存在する。

明治維新以降、近代化を目指した日本において地域に古くから根付いてきた様々な芸能や風習が公に否定され、禁止されてきた。二十村郷もその例外でなく、錦鯉や獅子舞などと並んで明治 9 年（1876）に、「新潟県布達第二百七十六号」により禁止された[40]。角突きは、その勝敗によって無為に牡牛の価格を上下動させるなど、二十村郷の畜産事業の健全な発展を妨げるとされただけではなく、動物虐待や賭博行為などを含む蛮行であると見なされた。『小千谷市史』には、郷民たちは、この地方の闘牛にそのような行為は伴わないということを強調したが、それが認められることはなかったと述べられている[41]。つまり、角突きは単なる野蛮な娯楽と認識されていたと考えられる。この風俗統制によって禁止された角突きが復活したのは、明治 36 年（1903）であるが、それは経済の論理に依るものであったと渡邉は指摘している。

当時、国内では食肉需要の増加に伴う近代的な肉牛生産体制の整備が主張され、和牛の改良増殖政策が推進されつつあった。この政策のひとつが明治 33 年（1900）に制定された産牛馬組合法であり、二十村郷でも角突き解禁の同年、二十村郷の 4 名を中心とする古志郡産牛組合が設立されている。渡邉は、彼らが「畜産振興」という旗印を掲げて、牛を利用した習俗である角突きの再開を迫ったことを明らかにしている[42]。つまり、このような畜産動向が、牛を使用する行事である角突きの解禁に正統性を与えていたのである。しかし、このような動向における、担い手たちの「牛飼い」から「畜産農家」への変化が、またもや角突きの消滅を招いてしまうことになる。

畜産振興という経済の論理を利用して、順調に牛の飼育頭数を増やした担い手達は、さらなる経済的利潤を求めて、角突き牛を出荷用の肉牛としての存在に変化させていったのである。当時から牛を飼育していた、ある担い手は当時を振り返り、「牛は経済動物だったんです。どんなにいい牛でも、高い値が付いたら屠殺場に送ってたもんです。一年間飼い通す牛っていうのはほとんどないくらい。」[43]と述べる。その結果、角突きは昭和元年に（1925）途絶を迎える[44]。折しも当時は大正から昭和中期まで続く不況の只中であり、自らが希求した娯楽としての角突きも、経済の論理の前では無力だったのだと考えられる。次に角突きが再開されることになるのは、不況が一段落した昭和 9 年（1925）である[45]。

昭和 9 年の復活以降、第二次世界大戦中にも継続された角突きであるが、終戦後 GHQ による統治政策の一環として動物競技が禁止されたことに伴い、一時的な休止に追い込まれたものの、昭和 26 年（1951）には復活を果たした[46]。この復活を契機に初めての担い

手組織である「山古志闘牛協会」が発足し、角突き牛も順調に増加をしていた。しかし、角突きはまたしても経済の論理の前に消滅を迎えてしまうことになる。この当時は、戦後復興下において、都市部は好景気を迎えており、角突きを担ってきた二十村郷の青年・壮年層の多くが出稼ぎに村を離れてしまった。これと同時に養鯉業が勃興し、収入上の理由から多くの牛飼いが養鯉業に転向していった。このような状況の中で畜産の相対的な経済的価値は極めて低くなっていった。さらに、戦後の市町村合併により二十村郷を形成していた各集落は長岡市、小千谷市、川口町、旧山古志村に分断され、その混乱の中で昭和 42 年（1967）に角突きは休止をされることになる。

以上のように、角突きは二十村郷の近代化と共に、その経済性が問われるようになり、娯楽と経済の不安定なバランスの中で消滅と再開を繰り返してきたのであるが、昭和 49 年（1974）に再度の復活を遂げる際に、「経済的価値」を超えた、新たな論理を身に付けることになる。すなわち「伝統」と「観光」の論理である。次節では、この論理を身に付ける過程と、これによる角突きの分節化について述べていくことにする。

第 2 項　山古志と小千谷　―分節化した角突き―

牛の角突きは、前述のように娯楽と経済のバランスの中で、細かな中止・再開を繰り返しながら続けられてきたが、昭和 42 年（1967）からの途絶における再開プロセスにおいて、「伝統」と「観光」という二つの論理を身に付け、角突きはそれまでの新潟県二十村郷という地域単位から、旧山古志村と小千谷市という二つの地域の角突きに分節化する。復活当初は、「山古志闘牛協会」を継承した、行政母体の関わらない担い手組織である「越後闘牛会」が二十村郷全体の角突きを管轄していたが、昭和 50 年以降はそれぞれに別組織を設立し、独自で角突きを開催するようになった。これは、再開にあたって行政から支援を受ける際に、居住地が異なる会員が同一の組織で活動することの困難さがあったためである。そして、山古志・小千谷の両角突きは、分節化直後はもともと同地域でおこなっていた行事ということもあり、牛を互いの大会に出場させあうなど、協力関係にあったものの、徐々に角突きの在り方に対して目指すべき角突きに方向性の違いが生じてきたということが聞き取りによって明らかとなった。つまり、時代に取り残されないように積極的に角突きを変容させ、興行化していくことを是とした山古志と、伝統との連続性を強調し、急進的な興行化を敬遠した小千谷の間に亀裂が生じたと考えられるのである。

これにより長らく別個で興業をおこなっていた角突きであるが、中越地震以後、角突きは新潟二十村郷の地域全体の重要な伝統文化であるという担い手たちによる再評価や、ユネスコ無形文化遺産への登録を目指すことを契機として、山古志・小千谷両地域の協力関

係が復活しつつある。ここではこの昭和期後半の再開プロセスにおいて、新たな論理を身に付けて分節化した角突きについて、山古志、小千谷の両視点から、それぞれの考え方や角突きの動態についてフィールドワークによって得られた知見を基に述べていく。

昭和 42 年（1967）からの途絶において、まず、角突きへの再開へと動き出したのは山古志の担い手たちであり、現山古志闘牛会の会長である松井治二という人物を中心に再開への準備が進められた。松井は角突きが途絶えていた時期を「何か物足りなかった。生活にハリがなかった。」[47]と述べており、集落の娯楽を取り戻すために、昔なじみの仲間たちに声をかけ奔走したと回想する。

この動きの契機になったのは、昭和 45 年に山古志の地を訪れた、民俗学者の宮本常一の進言である。宮本は日本が高度成長期時代を迎えた 1960 年頃から、観光開発が地域社会に及ぼす影響について強い関心を持ち始め、日本観光文化研究所を設立して観光文化発展に向けての実践活動を試みた民俗学者である。彼は、観光文化を地域の振興、人間の交流という視点で捉え、地域文化・地域経済の自立があってこそ観光は成り立つという考えの下、日本中を旅して歩き観光の在り方について先駆的な発言を行った[48]。山古志は、その宮本を「活気ある村」をつくるための施策の一つとして招聘したのである。新潟県長岡地域振興局が出版した『越後牛の角突き街道をゆく』[49]という書籍によると、彼は豊かな自然環境とひっそりと残る文化的遺産という観光資源に驚き、山古志の住民に自分たちが住んでいる土地がどのような状況にあるのかを理解することの必要性を説いたとされ、その方策として、地形の模型の制作を提案するとともに、村の生活の歴史やその道具の収集し観光資源として活用していくことを提案したことが明らかになっている[50]。そこで、旧山古志村政は観光協会の設立による村の資源を活かした観光開発を検討するとともに、民具の収集などの文化財の掘り起こしを開始した。その中で「再発見」されたのが牛の角突きだったのである[51]。

昭和 49 年（1974）に角突きは再開されるのだが、担い手たちの語りによると、その際に、それまでの出資者から花金をもらい、観衆に無料で角突きを見てもらうという花興行と呼ばれる自主興行形態ではなく、観客から入場料を取って開催するという興行の形態へと変容を遂げた。彼らは、宮本から「この地域のためには観光の核を作らなければならない。」という進言を受けたと語っており、山古志の闘牛関係者は角突きの復活に際し、観光客からの収入増加による経済的自立を目指すため、角突きを興行化させる道を選んだのだと考えられる。昭和 50 年には株式会社である「山古志観光開発公社」（現山古志闘牛会）を設立し、観光事業としての体制づくりも行われている。この時期を境に、これまでの入場料を取らない、単なる娯楽として行われきた角突きに「観光資源」という行事存続のための正統性が与えられたと考えることができるであろう。

さらに、この宮本の影響により角突きは地域が誇る「伝統文化」としても位置付けられていくことになる。宮本は当時文化庁調査員であった木下忠に連絡し、牛の角突きの調査を依頼した[52]。これによって昭和53年（1978）に角突きは国指定重要無形民俗文化財の指定を受け、角突きの文化的特性が再解釈された。特に、牛の角突きは神事性を帯びた祭祀としての側面があるという解釈が語られるようになったと指摘することができる。

文化財登録を視野に入れる以前の、昭和 42 年に編纂された『小千谷市史下巻』にはこのような記述がある。

> この地方（二十村郷）の闘牛は、他の地方のそれと異なるいくつかの特徴を持っている。第一に祭祀とは関係ないもののようで、〔中略〕農村娯楽としての闘牛が発達したと考えて大過ないのではないかと思われる[53]。（括弧内筆者追記）

このように、角突きは祭祀ではないという解釈がなされているのであるが、現在発行されている角突きに関するパンフレットやガイドブック、ホームページなどでは角突きは神事であり、祭祀として行われてきた行事であるという記述が多く確認できる。これは、昭和 53 年に重要無形民俗文化財に指定される際に提出した資料を、二十村郷牛の角突き習俗保存会が編集し、昭和 55 年に刊行した『二十村郷の牛の角突きとその習俗』という冊子の影響が考えられる。この冊子の中に次のような記述がある。

> 二十村郷の牛の角突きは数百年、あるいは千年の歴史があると伝えられ、長い歴史の中で神聖なお祭り行事として賭事のない健全娯楽として続けられ、本州でただ一ヶ所残ったのであります。〔中略〕いずれにせよ起源等については定かでないが、神事として行われてきた事には間違いない[54]。

このように、角突きは神聖なお祭り、すなわち祭祀として続けられてきたということが強調されている。実際に、多くの資料も引用元として、この文化財登録をきっかけとして作成された冊子の名前を挙げており、ここから現在の資料に見られるような、角突きは「伝統的な神事である」という典型的な言説が構築されていったと考えられる。つまり、角突きに「伝統」という価値が新たに付随することになった。そして、この伝統文化を伝承していくことの重要性を、担い手たちも認識し、積極的に利用していくことになるのである。

さて、山古志の担い手たちが主導して復活した角突きであるが、渡邉によると、小千谷市側においても、角突きは誇るべき伝統文化として、そして観光資源としても注目されるようになり、市からの闘牛場移譲に伴って、昭和 53 年に「小千谷闘牛振興協議会」が設

立された[55]。これにより、牛持ち、勢子、そして牛は、各々の居住地に応じたいずれかの組織に所属するようになり、これまで角突きを統括していた越後闘牛会はその役割を終え、形骸化していくこととなる。

こうして、二十村郷の角突きは山古志の角突きと、小千谷の角突きに分節化したのであるが、聞き取りによると分節化当初は大半の牛が相互に出場し合っていたといい、双方が同一の文化として捉え、協力関係を築いていたことがわかる。しかし、角突きの興行化と伝統を守ることに対する考え方の違いが、この山古志・小千谷の協力関係に徐々に亀裂を走らせていったと考えられるのである。

山古志においては、角突きを興行化させるにあたり、その変容に対して寛容な態度を示した。担い手たちは、角突きが文化財登録をされた頃より、外部からの観光客を積極的に取り込み、著名人のゲストを招いたり、大型バスによる観光ツアーなども積極的に誘致をしていたと述べる。角突きが行われる前座には、演歌歌手による歌謡ショーなどの観客に楽しんでもらうための催し物もおこなわれるようになった。また、通常の興行とは別に団体客用におこなわれる観光闘牛においては、女性が土俵に入り牛に触るという、それまで禁忌とされてきたものも許されるようになったという。ただし、角突きの取組自体は昔からの習俗を保って行っていた。山古志の担い手たちは、「決して、観光客を取り込むために観光化したわけではないが、伝統を守りながら、多くの人たちに角突きを見てもらうために努力した。」という語りを繰り返す。山古志の担い手たちは、「観光化」という言葉を避け、角突きの核である取組を昔ながらの習俗通りに行うことで、伝統文化であることの価値を担保しつつ、その周辺を取り巻く文化を変容させながら、角突きを興行化させることを狙っていたと考えられる。つまり、地域の中で楽しまれていた角突きを、観光客からの期待に応えるものにするために変容させていったのである。しかし、このような狙いが、より「伝統的」な形式で角突きを続けていこうとした小千谷の角突きと方向性の違いを生み出すことになる。

山古志の角突きと小千谷の角突きがまさに分裂をする時期に、小千谷闘牛振興協議会にいたある担い手は、「彼らにとってみりゃ、我々は目の上のたんこぶだったんだろうな。オレももう山古志の地は踏まんと言ったもんだ。」[56]と当時のことを回想した。また、現在の担い手たちも、自分たちの角突きを語る際に「我々は伝統を大事にしながら、昔からの角突きを続けてきた。」、「うちらはショーや出し物などは全部断ってきた。」[57]などと、決して山古志の名前は出さないが、対立するものとして山古志の角突きを想定しながら語っているように思われた。ただ、小千谷の角突きも興行化を完全に拒否したわけではない。彼らもまた、「多くの人に角突きを知ってもらいたいし、見に来てもらいたい。」[58]という意志は当時から存在していた。入場料を取って運営をする興行形態も山古志と何ら変わり

はない。つまり、彼らもまた、角突きが外部からのまなざしに対して、どのように捉えられるかということを意識し、山古志とは対照的に、いわゆる「昔からの角突き」を伝承しているということを強調することで、外部からのまなざしに耐えうる行事に仕立て上げていったと考えられる。そして、伝統との連続性を主張し、「昔からの角突き」にこだわっているという語りをする小千谷の担い手たちは、その「昔からの角突き」を蔑ろにする山古志の角突きを同一の文化という認識から、対抗する文化へと認識を変え、山古志の角突きと距離を取るようになったと考えられる。

その結果、山古志、小千谷の両団体の交流は徐々に少なくなっていき、震災直前には相互に牛を出場させることはほとんどなく、各団体内の取組が大勢を占めるような状況になっていった。また、この両者の角突きに対する態度の違いという文化的背景が、震災からの復興過程や、震災後の変容にも両者の差異を生じさせることになったと考えられるのである。

第 4 節　本章のまとめ

本章では、主に中越地震以前の牛の角突きの歴史的・文化的背景について概観した。まず、角突きの慣習についてまとめた後、二十村郷の地理的背景により、農村の娯楽として角突きが続けられてきたことについて述べた。そして、その習俗が単なる娯楽から経済性を問われるものに変容し、さらに「伝統」と「観光」という論理を身に着けながら現在まで伝承されていることを明らかにした。また、山古志と小千谷において、「伝統」に対する考え方の違いから、二十村郷の角突きから二つの角突きへと分節化したことに言及した。

次章では、この角突きが中越大震災の被災からの復興において、どのような変容をしたのかということを検証していく。その際に、本章で明らかにした角突きの歴史的・文化的背景を考慮しながら、論を進めていくことにする。

22　曽我 1991

23　石川 2004,pp.959-960

24 広井（1998）によると『垂穂録』には次のような記述がある。
「毎年、三月牛の角づきといふ事あり。村々にかひ置きたる牛をことごとく出して東西に分けたて人の相撲のごとく互いに角をふれて勝負するなり。其後負けたる牛、勝ちたる牛にあへば必ず路をさけて恐るる体なり」

25 『南総里見八犬伝』の一説に「這個(しゃこ)の闘牛(うしあわせ)の光景(ありさま)は、越後魚沼郡(えちごいをののこふり)、塩沢(しほさわ)の里長(さとをさ)の鈴木牧之(すずきぼくし)が、庚辰(かのえたつ)の春三月(やよい)廿五日、彼地(かのち)に到(いた)りて、目撃したる図説により由れり。」という一文があり、 鈴木牧之からの情報提供があったことが伺える。

26 広井 1998,p127

[27] 両団体の会員は山古志・小千谷を中心に関東地方にまで広がっている。会員の年齢階層は、山古志は 50 代から 70 代が主であるのに対し、小千谷は 10 代から 80 代まで幅があり、数世代に渡って所属する世帯も少なくない。また、会員の半数以上が青年・壮年層から構成されており、彼らは後継者集団「北斗会」を組織している。この組織は定期開催時の勢子、準備、次第進行を一手に取り仕切るほか、ホームページ運営やメディア出演などの広報活動を行っている。対して、年長者の役割は北斗会のサポート、行政や関係諸団体との協議に重きがおかれ、全体として後継者の意向を反映させるような活動が行われている。

[28] たまり場とは、闘牛場周辺に大会に出場させる牛を繋養させている場所のことである。

[29] 「カケ」とは自分の角で相手の角を掛ける技であり、「ハタキ」とは自分の角を相手の頭に打ち込む技である。その他にも多様な技があり、二十村郷の角突き牛は、角の形を矯正せず自然な形で放置されるため、牛ごとに角の形に合った得意技がある。

[30] idid.,p121

[31] 広井 1999,p37

[32] 東 2007,p529

[33] 渡邉 2009,p222

[34] 山古志村史、小千谷市史を参照。

[35] 中山トンネルの建設は 16 年もの月日を費やす難工事であり、2003 年には「掘るまいか」という記録映画も製作されている。

[36] 須藤 2007,p131

[37] 渡邉 2009,pp222-223

[38] 広井 1999

[39] 渡邉, p223

[40] ibid.,p228

[41] 小千谷市 1967,p398

[42] 渡邉 2009,p231

[43] 2013 年 9 月 17 日、筆者聞き取り

[44] ibid.,p233

[45] ibid.,p234

[46] ibid.,p234

[47] 2013 年 9 月 17 日、筆者聞き取り

[48] 谷沢,2009

[49] 新潟県長岡地域振興局 2008

[50] そのほか、観光と一体化した農業の構築や、養鯉業の企業化など、山古志の自立に向けた提言を行った。

[51] 渡邉 2009,p236

[52] ibid.,p237

[53] 小千谷市 1967,p394

[54] 二十村郷牛の角突き習俗保存会 1980,p1

[55] 渡邉 2009,p236

[56] 2013 年 9 月 18 日、筆者聞き取り

[57] 同上

[58] 同上

第 3 章　震災による角突きの変容

この章では震災後における角突きの変容を考察していく。山古志と小千谷はほぼ同じ時期に角突きを再開させているが、異なる変容の様相を示している。これは、2 章において言及した、山古志と小千谷の角突きに対する認識の違いに起因するものと考えられる。つまり、担い手たちが角突きの存続のために、山古志においては、角突きを変容させていくという動態に表れ、小千谷においては従来通りの習俗を取り戻すという動態に表れているのである。

この地域差を浮き彫りにするために、震災後の角突きの変容を角突き牛、闘牛場、角突きをめぐる共同体、牛舎という 4 つの項目に分類し、分析をしていくことにする。

第 1 節　角突き牛における変容

二十村郷において角突きに用いられる牛は「赤牛」と呼称される南部牛であり、純粋な角突き用の牛として飼育されている。角突き牛にはそれぞれ飼い主である牛持ちが所有しており、かつては重立（おもだち）や旦那（だんな）と呼ばれる集落の牛飼に従事する富裕層がその大半であった。現在では牛持ちの構成も多様化しており、一般的な仕事に従事する者がほとんどである。また、2 章で指摘したように、角突きに関わる者の間では牛の強弱が概ね共有されており、長年にわたり取組の上位に位置する牛は「横綱牛」と形容されることが多い。数代にわたって横綱級の牛を飼ってきた牛持ちは「厩柄（うまやがら）が良い」と形容されることがあり、強い角突き牛を持つことが富や名誉というような社会的象徴として認識されている。

さて、地震発生以前に飼育されていた角突き牛は山古志においては 62 頭、小千谷においては 31 頭であったが、地震による牛舎の崩壊や避難後の体調不良などにより、多くの角突き牛が犠牲になった。地震翌年の角突き再開時（山古志は平成 17 年 5 月 4 日、小千谷は同年 6 月 5 日）にはそれぞれ山古志は 31 頭、小千谷は 25 頭にその数を減らしている。しかし、担い手たちによる新しい牛持ちの発掘や、他の闘牛開催地域や生産地からの協力[59]、新潟県や長岡市からの補助制度[60]などにより頭数が少しずつ増加した。現在山古志では、震災前とほぼ同じ頭数である 60 頭が活躍しており、小千谷においては 50 頭と過去最高の頭数を保有するに至っている。

この角突き牛に関する変容として、まず牛持ちの構成の変化が挙げられる。山古志・小千谷両地区において、震災後、経済的な理由などにより減少してしまった牛持ちの数を維持・増加させるために、新たな牛持ちの開拓が積極的に行われたのである。山古志におい

ては、新たに女性の牛持ちが初めて誕生することになった。長岡市内に居住する 20 代の若い女性である。彼女は京都の伝統工芸の専門学校を卒業したが、角突きの魅力に惹きつけられ、地元である長岡に戻り牛持ちを志すようになった。そして、震災を契機に山古志闘牛会に加入し、牛を飼うことになったのである。これまで女性が牛を飼うことが無かった背景として、本場所において女性が土俵に入ることは禁忌とされていることがある。もちろん彼女も入ることはできない。加えて、菅が指摘するように未去勢の雄牛である角突き牛の飼育は、日本の伝統的な男児の子育てに内在するマスキュリティが投影されている[61]と考えられ、女性の牛持ちは存在し得なかったのである。これに対し、彼女の入会を許可した松井は「昔からいい牛が育つ家には細やかな心配りをしながら牛を育てる女性がいた。だから女性が牛持ちになることに抵抗はなかった。山古志がもう一度元気になるために仲間を増やしたい。」と語っており、角突きの存続のため、柔軟に角突きの意味づけを変容させていったことが伺える。

小千谷においても、震災が契機となって、牛持ちの親戚や子息が新しく牛を飼い始めたり、以前は 2 人だった県外の牛持ちが 7 人に増加するなど、新たな牛持ちが増えている。震災以前から外部の牛持ちは存在したが、それはもともと小千谷地域に住んでいたが転出した人や、親族が小千谷に住んでいる人など、小千谷に何らかのゆかりがある人が牛持ちになる例が多かったが､現在では地域に全く関連のない人たちが牛を保有するようになり、その顔ぶれは大学教授、弁護士、アナウンサーなど多岐にわたる[62]。「伝統」に重きを置く小千谷の担い手にとって、角突きの文化的文脈を理解していない外部の牛持ちが増えることは、その「伝統」を壊す危険性を孕んでおり、敬遠されるべき事象なのではないかと考えられるが､担い手たちは「外の牛持ちは牛に関わらん」といい､彼らを歓迎している。つまり、外部の牛持ちたちは、牛舎を持っている牛持ちや共同牛舎に金銭を払って管理を委託している存在であり、小千谷の担い手にとって彼らは、自分たちが楽しむために育てる牛のスポンサーなのである。そのため、彼らが直接的に角突きの文化に関わることは無く、角突きの「伝統」が変容してしまう可能性はないという認識であった。

次に四股名の変容についてである。角突き牛にはそれぞれ四股名が付いているが、前述したように、牛を飼っている家の屋号を付けることが一般的である。強い牛を所有することが、牛持ちの富や名誉、または家の力を象徴するものであり、一種のステータスであることが共通認識として形成されている。

しかし、震災以後は山古志の角突き牛は「支援ありがとう号」や、長岡花火において復興祈念として打ち上げられるフェニックス花火にちなんだ「フェニックス」号など、震災に関連させた四股名が付けられている例がみられる。「フェニックス号」というのは、長岡市街で行われる長岡花火大会で打ち上げられる「新潟県中越大震災復興祈願花火フェニッ

クス」（以下、フェニックス花火と略する。）と関連させて付けられた四股名である。この「フェニックス花火」は、震災からの復興を記念して 2005 年から毎年打ち上げられている。この花火と角突きという復興の象徴をタイアップさせることで震災風化を防ぎ、観光振興にも繋げていこうとフェニックス花火実行委員会や闘牛関係者が企画し、角突き牛に「フェニックス号」という四股名が付けられたのである[63]。2011 年には山古志闘牛会から東日本大震災の被災者に対し、闘牛 1 頭が贈られ「天の風浜街道」と名付けられている。このように、四股名に屋号を付けることによって、個人または家の力を象徴する機能を有していた角突き牛が、支援への感謝や、震災復興を表象する機能をも担うようになっている。また、これらの表象を与えられた牛の取組になると、その命名の経緯や意味を、解説者が丁寧に説明する。これによって、観光客がこの牛たちに感情移入をしやすくなっていると考えられる。実際に、説明をされた牛が攻め込むと拍手が起こり、会場全体で応援するようなムードが醸成される。つまり、この牛の四股名を変容させることによって、これまで角突きに触れたことが無く、その文化的文脈を理解していない観客も楽しめる行事にすることに成功していると考えられる。

小千谷においては、「伝統」を守るという彼らの意識に則って、これまでの習俗通りに牛には牛持ちの屋号が付けられており、山古志のような変容は見られない。

第 2 節　闘牛場における変容

山古志の興行におけるメイン会場、山古志闘牛場については、闘牛場自体の被害は少なかったものの、そこへ向かう道が崩壊していた。そのため、復旧が完了し山古志闘牛場で角突きが再開されたのは平成 20 年である。翌年、平成 21 年には大規模な改修工事が行われた。この改修は以前より長岡市と山古志村との合併に際し計画されていたものが震災によって頓挫していたものである。総事業費は約 1 億 2300 万円である。2 階席（200 人）が新設され入場可能数は計 1200 席になった。この改修においても震災復興との関連が色濃くみられる。

まず、二階スタンド席が新設されたが、そのスタンドの裏側には地元の子供たちが書いたメッセージと全国から寄せられたメッセージが記されている。その内容は「地震に負けるな山古志！」というものであったり、「がんばろう山古志！」といったもので、大半が震災復興に関連したメッセージであった。また闘牛場に向かうまでの坂道には南総里見八犬伝の角突きの図や二十村郷の歴史をまとめた紹介文などに加え、震災時の被害の様子や牛の救出写真などが展示されていた。

写真２　山古志闘牛場のメッセージボード

写真３　被災状況の展示

写真４　小千谷のみまもり岩

これは、観光客を楽しませるための観光資源であると同時に、越智が指摘するところの、災害の「記憶の場」として機能していると考えられる。越智は、震災モニュメントはその表象内容に関わらず、まちの共同の記憶を想起させるという機能を持つ社会的装置であると述べている[64]。闘牛場は震災以前より地域住民の交流の場という、公共性を帯びた施設としての役割を担っていたのであり、「記憶の場」という社会的機能を担うことになるのは、当然の帰結であったとも考えられる。

小千谷の興行の会場である小栗山闘牛場も、山古志の池谷闘牛場と同様に闘牛場自体の被害は少なかったものの、トイレの数を増やし、バリアフリーに対応したスロープを取り付けるなどの改修工事が行われた。この小栗山闘牛場の施設改修は、小千谷の担い手が震

災後の変容として唯一積極的に語る要素である。

そして、小千谷にも闘牛場周辺にみまもり岩という、観光資源であり、「記憶の場」でもあるモニュメントが作られた。これは、震災によって割れた大岩が牛の形に似ているということから、そこに角突き牛の象徴である「面綱」を掛けたモニュメントである。このみまもり岩は小栗山闘牛場に隣接した駐車場の一角に設置されている。ここは、小高い丘の頂上になっており、東山地区の集落を見渡せるようになっている。この地区に住む住民は、ここで月日が経つごとに復興を遂げていく小千谷を見下ろしながら、みまもり岩を通して震災体験の共同記憶を甦らせるのである。

以上のように、小千谷においても闘牛場における変容が起きていることを指摘したが、これは角突きの本質には関わらない部分であり、伝統との連続性を主張する小千谷の担い手たちにとっても変容を語りやすいのだと考えられる。

また、闘牛場周辺においても、2009 年に長岡市地域振興局が、かつて「二十村郷」と呼ばれ、角突きや人的交流を行ってきた三市町にまたがる地域を「越後牛の角突き街道」とし、闘牛場までの看板設置やモニュメントの設置を行っている[65]。二十村郷という地域単位においても、角突きを利用した「記憶の場」の形成が図られており、角突きが復興における社会的な象徴としての役割を果たしていると示唆できるであろう。

第 3 節　角突きをめぐる共同体の変容

山古志における、震災に関連した共同体の変容として「山古志闘牛会」の発足が挙げられる[66]。同会は、これまで大会運営を担ってきた「山古志観光開発公社」の闘牛部門と、避難時の長岡での闘牛飼育のために設立された「山古志闘牛飼育組合」が統合したもので、飼育から興業まで一手に引き受けている。勢子や牛持ちら 43 人で発足し、興業と飼育の二部門で構成されている。この会の発足を契機に大会数も 9 回から 12 回に増加した。「山古志闘牛会」の設立は、「山古志観光開発公社」が宿泊施設やスキー場の指定管理者となったため、公社から自立することで、角突きで得た収入を飼育や興行事業にすべて還元できるようにすることが狙いである。しかし、会長は「山古志観光開発公社」の社長であった松井が引き継ぐ形で着任しており、実態としてはそれほど大きな変化はない。

大会当日の運営には、新たに「山古志木籠ふるさと会」という組織も携わるようになった。この組織は、震災後人口が減り、年中行事や集落の維持管理等を山古志の集落住民のみで行うことが難しくなったため、集落を離れた人や集落外の支援者に準区民として登録してもらい、事業や行事などを支援してもらうという趣旨で設立された組織[67]である。この会員が平成 22 年度より角突き当日の受付や、場内清掃などの雑務を手伝っている。こ

の組織の運営参加も震災による角突きをめぐる共同体の変容と言えよう。

一方、小千谷における角突きを主催している小千谷闘牛振興協議会は地震後も同組織のまま活動をし、現在は正会員と準会員とを合わせて100 名弱となっている。山古志のように、共同体を構成するメンバーが減少することは無く、外部からの取り込みをする必要が無かったのである。

また、震災を機に角突きの再評価が進められ、研究者の進言もあり、ユネスコ無形文化遺産への登録も視野に入れている。このために、二十村郷全体の文化遺産としての角突きというものの受け皿が必要になった。そこで、角突きの分節化を機に形骸化していた越後闘牛会の会則を作り直し、再び機能を持たせるようになったのである。これにより、震災直前にはほとんどなかった山古志の角突きと小千谷の角突きの交流が、徐々にではあるが復活しつつあり、2012年度の角突きより、山古志と小千谷の角突き牛が、互いの場所に出場をしあっている。これについて、山古志の牛持ちは「うちからは5頭ぐらい行ったけど、向こうからは2頭ぐらいしか来てない。」と愚痴をこぼすが、「(小千谷の角突き関係者には)絶対に言うなよ。これから（小千谷から来る角突き牛）が徐々に増えていけばいい。」と前向きな意見を述べている。これは、担い手の高齢化が進行する山古志において生じる、「うちらだけでやっていても将来がない。」という危機感に依拠するものであり、担い手の再生産が成功している小千谷との協力関係を築きたいという意向が反映されていると考えられる。

そして、小千谷の牛持ちも「同じところ（二十村郷）でやってきた角突きなんだから、一緒にやればいいと考えるようになった。」と語り、お互いに牛を出場させ合うことを容認している。このことから、小千谷の担い手においても、角突きに対する再解釈が進行している様子が伺える。

第 4 節　牛舎における変容

震災後の角突きに関して、山古志と小千谷で最も明確に差異が生じたのは牛舎における牛の管理の問題である。震災以前は両地域とも個人で家の近くに牛舎を持ち、そこでそれぞれに牛を飼うことが主流であった。しかし、山古志では長岡の仮設共同牛舎でまとめて管理をしていた流れで、山古志にも共同牛舎を造り一括で管理をするようになった。通称闘牛アパートである。現在は震災を機に山古志に戻ってきたと言う 40 代の牛持ちが専属の管理人となり、ほとんどの角突き牛を一括で管理している。震災以後、山古志は土砂災害による住家被害が大きく、個人牛舎建設のための適切な土地が確保しづらくなっていた。そのため、この共同牛舎方式の導入は山古志の角突き存続に大きな影響を与

えたと考えられるが、決してこれは積極的な変容ではなかったと考えられる。ある牛持ちはこう語る。

「(牛の共同管理方式に）抵抗はあったさ。自分で飼えりゃあ、飼いたいと思う。自分で飼って、技を教えて、鍛えて、そういう牛が角突きをするから面白いんだな。だけど、お金もない、土地もないから仕方がねえことだ。」[68]

山古志の担い手たちは自らが置かれた状況を見極めた上で、角突きの存続のために妥協をせざるを得なかったのである。そして、「伝統」を変容させていくことに対しては、寛容な姿勢を示し続けてきたものの、自分を投影するものとしての牛を戦わせるという、娯楽としての角突きの本質が揺らぐことに、当初彼らは抵抗を感じていたのである。

しかし、現在では、同じ場所で牛を飼うことで牛持ち同士が顔を合わせる機会が増え、結果的に結束が強まったと好意的に捉えられるようになっている。共同牛舎という拠点ができたことで、懇親会などの機会も増加しているという。場所前の取組編成会議もこの共同牛舎の 2 階でおこなわれるようになった。そして、山古志の担い手たちは、この共同牛舎で育まれた人間関係を背景とした、新たな角突きの面白さを見出すことになる。それを端的に表したものが、以下の担い手の語りである。

「みんな一緒の意識が出てくるわけだ。おんなじ所に牛を置いて、土日にみんな面倒見に来て。そういう中で取組となると、自分だけ（の意見）を出さないというか、お客さんが喜ぶ取組を（しよう）と思うようになる。自分の牛だけがどうやこうや言うんじゃなくて、全体をみて、喜ばれる取り組みをしようという感じで震災後はやってきてる。どういうワリを作って、来てくれるお客さんを喜ばせようか考えるのが楽しいんだ。こういうところに山古志と小千谷の取り組みの違いが出ている。」[69]

この語りから推察されることは、共同管理方式を取る上で捨象せざるを得なかった、個人の娯楽という側面は後景に押しやられ、角突きの面白さが、観客にいい角突きをいかに見てもらうかという全体性のもとで見出されるようになったということである。そして、これを支えるのが、共同牛舎で育まれるより強固となった人間関係であるということが示唆される。

すなわち、共同牛舎方式を採用し、牛持ち同士のコミュニティの結束が強まったことで、各家の財産として認知されていた角突き牛が、共同で管理をする地域の財産という認識をされるものへと変容を遂げたと言い換えることもできるであろう。

一方､小千谷の担い手たちは､自分の家で牛を飼うということに強いこだわりをみせた。小千谷においても牛舎の被害は甚大であり、その多くが立て直しを必要とする状況は山古志と同様のものであった。しかし、ほとんどの牛持ちたちが自分の家に牛舎を再建し、各自で牛を飼うという慣習を捨てることはなかった[70]。ここで語られることは、自分で牛を飼うということの「伝統」と「誇り」、そして、牛持ちの後継者を育てるためは必要不可欠な慣習であるということである。牛は自分で飼い、その名前に家の屋号を付けることが「伝統」である。そしてそれは、牛持ちの力を象徴するものであり、その牛がいい角突きを見せることに対して「誇り」を感じることができるのであるという。この「誇り」を感じるということが角突きを続けるための大きな「楽しみ」であり、共同牛舎形式で角突きが復活しても､それは我々にとっては意味のないことであると多くの担い手は口を揃える。

また、家の中で牛を育てることにより、自分の子供や孫が牛に触れる機会を担保し、次世代の担い手を育てることになるといい、高齢化が進み後継者不足に喘いでいる山古志の角突きとの違いは、自分の家で牛を飼うことを止めなかったことにあると主張している。確かに震災後、山古志が若い担い手が不足しているのに対し、小千谷では若手が多く、その多くは牛持ちの家の二代目、三代目が震災を契機に自らも牛を持ち始めた担い手たちである。これは、小千谷の担い手たちが、牛を家で飼うという文化が角突きの担い手を再生産するという機能を的確に捉え、それを震災後も継続して成功をさせているということの証左であろう。

写真 5　山古志の共同牛舎

写真 6　小千谷の個人牛舎

第 5 節　本章のまとめ

本章では角突きの変容について、角突き牛、闘牛場、角突きをめぐる共同体、牛舎という 4 つの項目に分類し、山古志・小千谷間の地域間の差異を抽出してきた。ここで、もう一度その結果をまとめておく。

山古志においては、震災以前から「伝統」を変容させることに寛容であったため、それぞれの項目においてドラスティックな変容がみられた。その要因としては、四股名の変容のように、観客を楽しませるためのものもあれば、大会運営における外部団体の受け入れや共同牛舎によるという変容のように、角突きの維持のためにやむを得ず行ったものもある。その中でも、牛の一括管理という変容は、自らのステータスを牛によって表すという彼らが角突きに求める楽しみの本質に関わる問題であったが、それに代わる楽しみを、観客にいい角突きを見てもらうという点に見出していることが明らかになった。

小千谷においては、彼らの「伝統」を維持しようとする態度により、その「伝統」が危険にさらされるような変容は行われなかった。特に、共同牛舎方式で角突きを再開させても意味がないという担い手たちは、個人牛舎で牛を飼うという「伝統」を守ることに強いこだわりを見せた。彼らはこの慣習を守ることによって、娯楽としての角突きの本質が保たれ、角突きの担い手が再生産されるという機能を知覚した上で、この個人牛舎における牛の飼育という「伝統」を維持していることが明らかになった。そして、彼らは変容したものとして、唯一闘牛場の変容を挙げる。これは、闘牛場の施設の変容が角突きの「伝統」に関わるものではないと彼らが捉えていたからだと考えられる。

59　日本全国の闘牛を開催している地域が持ち回りで開く全国会議、通称「闘牛サミット」における交流により隠岐、徳之島、沖縄から多くの成牛が導入された。

60　1 頭当たりの購入費 150 万円のうち、二分の一にあたる 75 万円を限度に補助。

61　菅 2013

62　中越防災安全推進機構 2011

63　『新潟日報社』 2006.8.4 朝刊 「地上にフェニックス　闘牛　長岡角突きで披露」

64　越智 2005

65　『新潟日報社』 2009.3.13 朝刊　「長岡、川口、小千谷闘牛通じ地域振興を　観光関係者ら会合」

66　同時に「山古志肉牛組合」も結成され、畜産牛の飼育体制も整えられた。

67　山古志木籠ふるさと会　ホームページ
http://yamakoshikogomo.com/furusato　最終閲覧 2012.10.15

68　2013 年 9 月 19 日筆者聞き取り

69　同上

70　小千谷においても共同牛舎は建設されているが、これは主に小千谷外に住む牛持ちの牛を飼育するための牛舎である。その上、「厩柄」を失わないよう、山古志のような集

合式の大規模牛舎ではなく、小規模な 3 棟牛舎の形式が採用されている。

第 4 章　牛の角突き再開の意義

本章において、新潟県中越地震（以下、中越地震と称する。）とその復興過程における角突きの動態と、再開意義について考察していく。まず、日本の典型的な中山間地域を襲った中越地震の被害とその復興状況を述べた後、角突きの再開過程を通時的に記述し整理する。そして、その再開に与えられた意義とは何であったのかということを、外部から認められた意義と担い手たちにおける意義という双方から検証していく。

第 1 節　中越地震の概要と被災状況

平成 16 年（2004 年）10 月 23 日 17 時 56 分頃、新潟県中越地方でマグニチュード 6.8 の地震が発生した。この地震の震源の深さは 13ｋｍで、最大震度は新潟県川口町で震度 7 を観測している。この地震の爪痕は大きく、死者は 68 人を数え、負傷者 4,795 名となっている[71]。住家被害は 12,604 棟（全壊 3,175 棟, 大規模半壊 21,167 棟, 半壊 11,643 棟, 一部損壊 104,619 棟）である[72]。

この地震は旧山古志村や小千谷市東山地区などの中山間地域を震源とする地震であり、この地域は日本有数の地すべり地帯であったことから、斜面の崩落などの地盤災害（222 ヶ所の林地崩壊や地滑りが発生）に伴う様々な被害が発生した。このため、震動による家屋倒壊だけでなく、土砂災害によっても多くの人的被害と家屋倒壊、道路崩壊等の被害が発生している。長岡市街と旧山古志村を結ぶ羽黒トンネルや小千谷市街と東山地区を結ぶ県道などが土砂災害により通行不能になり、電気・ガス・水道のライフラインも断絶した。このような状況の中、長期非難を余儀なくされる集落が多数発生し、23 市町村で延べ 24,577 世帯、80,869 人に避難指示・勧告が発令された。特に，甚大な被害に見舞われた旧山古志村では、地震発生直後、全 14 集落の 690 世帯、2,167 人に避難指示が出され、長岡市内に全村避難となった[73]。小千谷地区においても 29 地区、532 世帯に避難勧告が出された[74]。このため，ピーク時（2004 年 10 月 26 日）の避難者数は約 600 ヶ所の施設で 103,178 人にものぼったが、地震発生から 2 ヶ月ほどで被災した住宅の修繕や仮設住宅の整備が進み、長岡市や小千谷市の学校体育館などで最後まで避難生活をしていた被災者全員が退去し、本格的な冬を前に仮設住宅に入居した。これによって同年 12 月 22 日には県内すべての避難所が閉鎖されている[75]。

しかし、世界有数の豪雪地帯である同地域では，2005 年 1 月下旬から 2 月上旬にかけて 19 年ぶりの記録的な大雪となり（山古志村では 3 月 14 日に最大積雪深 356cm を記録）、地震で傾いたり被害を受けた建物が積雪の重みで倒壊（被害合計 77 棟、うち

山古志村 6 棟）するといった二次的被害も発生し[76]、住居等の安全が確認された後でも多くの人々は避難生活を強いられた。また、この雪害によりライフラインの復旧に時間を要し、住民たちの避難生活は長期間に及んだ。その後，仮設住宅入居世帯の住宅再建が進み、仮設住宅の入居世帯数は、2005 年 6 月末で 2,132 世帯、2006 年 10 月末で 1,427 世帯、同年 12 月末で 542 世帯と減少していくが、地震から 3 年近く経過した 2007 年 8 月末の時点でも、山古志村の住民が中心になお 150 世帯が仮設住宅での生活を強いられていた。すべての避難者が仮設住宅から出ることができたのは、さらに 4 ヵ月後の 2007 年 12 月末のことである[77]。

なお，仮設住宅に入居していた 3,224 世帯（2009 年 12 月時点）のうち、96.1 %が仮設住宅退去後も引き続き市内に居住している。持家が被災した 2,912 世帯の 84.4 %が自宅を修繕、新築、購入などして再建しており、持家が全壊した世帯でも 81.5 %が自宅を再建し戻っている[78]。旧山古志村へは住民の 53.9%の世帯数が帰村を果たしている。また、帰村を望む人を合わせると最終的な帰村割合は 70.9%程度になる見込みである[79]。このように、自宅再建率が高いのは，「新潟県中越大震災復興基金」によって，住宅再建に関する手厚い支援が行われたことが大きな要因となっている。この基金は中越地震からの早期復興のための各般の取組みを補完し、災害により疲弊した被災地域を魅力ある地域に再生させることを目的として設立されたものであり[80]、角突きへの補助も行っている。これについては第 3 節で詳述する。

第 2 節　角突きの復興過程

次に、中越地震からの復興過程における、角突き再開までの動態を整理しておく。10 月 23 日の中越地震発生後、山古志・小千谷地区においてはヘリコプターによる住民避難が行われ、畜産牛、角突き牛は安全な場所に避難させておくか、繋養していた紐を切った上で放置するという処置が取られた。しかし、牛持ちたちは「牛は生活そのもの」、「牛たちいなくなれば生きがいがなくなる」[81]という思いにより、すぐに自らの危険を顧みず救出のために動き出す。

山古志においては、松井が音頭を取り、歩くことに慣れている角突き牛を中心に、2 泊 3 日をかけて山から降ろした。畜産牛の救出は、経済的な損失を出さないために当然の行為であるが、角突き牛に関しても同等に扱われ、救出が急がれたのである。その後、旧山古志村長である長島の「伝統があって生きられる。なによりも早く牛たちを救わなくては復興ができない」[82]という思いからヘリコプターを使用した牛の救助活動も行われ、30～40 頭の角突き牛が生き残った。長島は自身も牛持ちであり、彼が働きかけたことによって行

政による迅速な救出が行われたことは幸運なことであった。救出された角突き牛は、半年ほど新発田市の畜産仲間に委託飼育を依頼し、その後、長岡市内に完成した仮設共同牛舎で飼育を行った。

小千谷においても、山古志と同様に牛持ちたちが山に入って救出活動を行い、20 頭前後の角突き牛が助け出された。小千谷の牛たちは、一度長岡市の家畜市場に集められたが、ここは牛の長期飼育をできる環境ではなかった。そこで、個々人で飼育を委託できる場所を探し、最終的には、岩手、新発田市、小千谷市内と分散して飼育された。

この当時の牛持ちたちの心情は「角突きを再開させるなんて全く夢にも思わなかった。とにかく、家族のように可愛がってきた牛たちを助けたい」[83]という思い一心であったという。山古志・小千谷両地区で予定されていた 11 月場所はもちろん中止されることになった。だが、角突き再開への動きは早急なものであった。小千谷においては、「北斗会」に所属する若い担い手たちが中心となり、被災直後から再開への道程を模索し始める。震災以前から小千谷へのフィールドワークを続け、被災直後に現地に入った菅は、生活再建がままならない状態にもかかわらず、避難所において担い手たちが自ら角突きを語り始め、そこでは角突きを継承することが大前提となっていたことを報告している[84]。彼らは、避難所の一角に集まって、牛の避難先や、来年の角突き復活に向けての展望などを話し合い、角突き復活への具体的な準備を始めていったのである。

山古志においては、昭和後期の再開において尽力した松井が中心となり再開へと動き出した。平成 16 年 12 月 10 日、避難所から仮設住宅への引っ越しが始まり住民の生活にも一応の目途が立ってくる中、松井が役員を務める「山古志観光開発公社」の役員会が開催された。松井は、平成 17 年度の角突き開催は厳しいのではないかという大方の意見を予想していたが、松井が例年通りの 5 月から角突きを再開させることを提案すると、「ぜひ、山古志の復興のために角突きを」という意見が大半を占めた。この役員会の結果を受けて、角突き再開への動きが本格化していくことになる。

このように、両地区において角突きの早急な再開に向けて、担い手間の合意形成が成されていったが、角突きのメイン会場である山古志の池谷闘牛場、小千谷の小栗山闘牛場は、施設自体の被害は軽微であったものの、そこへ向かう道が崩壊しており、すぐに角突きを再開できる状況ではなかった。そのため、「新潟県中越大震災復興基金」や日本財団からの助成金を利用して、仮設の闘牛場を設置し角突きを再開させることになる。山古志は長岡市東山ファミリーランド内に仮設闘牛場を造成し、その近くに仮設共同牛舎も建築した。そして、平成 17 年の 5 月 4 日に初場所を迎え、11 月まで計 8 場所をこの仮設闘牛場で開催した。翌年も、いまだ山古志の集落は避難指示が継続中であり、仮設闘牛場からの牛の移動も困難なため、継続してこの臨時闘牛場で行われたが、9 月の 1 場所だけは、「全国闘

牛サミット」の開催に合わせて、本来の池谷闘牛場で開催された。

小千谷においても、山古志と同様に仮設の闘牛場を長岡市内の白山運動公園に設置し、角突きを再開させた。小千谷は大雪により仮設闘牛会場の設置が遅れたため、山古志に遅れること 1 ヶ月の平成 17 年の 6 月に長岡市の白山運動公園内で第一回の開催となった。その後、11 月まで計 7 場所を開催している。翌平成 18 年度は、小千谷は山古志に比べ比較的に早く復旧が進んでいたため、この臨時の闘牛場と、本来の会場である小栗山闘牛場とで交互に開催をしている。両地区とも、一年を通して本来の闘牛場で開催するようになったのは平成 19 年度からである。

以上が、中越地震の被災からの角突き復興の動態であり、被災直後から担い手たちによる再開への合意形成が行われ、非常に早急な再開がなされていることがわかる。では、この再開にどのような意義を与えられたのだろうか。次節では、メディアにおける角突き再開の意義、行政機関からの期待が、震災以前から角突きを支えていた「伝統」と「観光」という文脈の中で展開されていたことに着目して要説していく。

第 3 節「復興のシンボル」としての角突き

史的変遷の中で、「伝統」と「観光」という論理を身に着けながら伝承されてきた角突きは、震災からの復興に際しても、この「伝統」と「観光」という枠組みの中で存在意義が見いだされ、「復興のシンボル」として表象された。特に、多くのメディアからは、地域住民が震災を乗り越えて継承している「伝統」として注目されるようになる。つまり、震災からの復興に際しても、その価値を「伝統」との連続性の中で語られたのである。角突きの再開を報じる新聞には次のような見出しが付けられている。

「山古志の闘牛、地震を乗り越え、伝統行事が復活」（新潟日報社 2005.5.5）
「小千谷で伝統の牛の角突き　復興の象徴に２千人歓声」（新潟日報社 2006.5.3）
（傍点は筆者加筆）

そして、角突きはテレビメディアにも取り上げられ、いくつかのドキュメンタリーが製作されている[85]。そこで、描かれていることは地域の「伝統文化」を絶やさないために奮闘する担い手たちであり、その「伝統文化」の中で育まれるとされる「絆」について番組内で語られている。番組宣伝の一説を引用しよう。

伝統を守り抜こうと熱い思いを持つ勢子や住民たちが立ち上がり、2008 年には山古志闘牛場で牛の角突きが 4 年ぶりに復活しました。番組では、地域の誇り、伝統を守ろうと牛と生きる男たちの姿に密着します[86]。

（傍点は筆者加筆）

このように、担い手たちは「伝統」を守るために角突きを復活させたと理解されていることがわかる。震災によって甚大な被害を受けたにも関わらず、担い手たちが必死に自らの「伝統」を守り、それによって地域の絆を取り戻していくというストーリーは、非常に「物語性」が高く、大衆に受け入れられやすいものだったと考えられる。そして山古志・小千谷の担い手たちは、その「復興物語」[87]に合わせ、多くの媒体で「伝統」を守ることの重要性を語っていくことになるのである。

特に小千谷の担い手たちは、震災以前から「伝統」との連続性を主張し続けていたため、その傾向が顕著であった。小千谷地区の復興を取り上げた書籍の中で、小千谷闘牛振興協議会実行委員長である平沢氏は「先人たちが伝えてきた角突きを次の世代に伝える義務が私たちにはあります。」（傍点筆者追記）と述べている[88]。この「義務」という言葉を使っているのは、管見の限り小千谷の担い手だけである。つまり、小千谷の担い手たちは、角突きの「伝統的な価値」を所与のものとし、守らなくてはいけない「伝統文化」として語っていたことがわかる。そして、彼らは、「小千谷、東山の復興は角突きから」というスローガンを掲げ、その「伝統文化」である角突きの再開が地域のためになるとして、喧伝したのである。また、「伝統」を変容させていくことに比較的寛容であった山古志の担い手たちも、震災の 2 年後である 2006 年に出版された書籍のなかでは「苦しい時ほど昔から行われてきた行事でムラの絆を深め、支えあいたい」[89]と語っており、角突きという伝統行事を続けることで、地域の絆が深まることを示唆している。

すなわち、両地域の担い手たちが、角突きを伝承することが震災からの復興に有益であると語り、その伝統は地域を復興させる核になるとして、角突きを「シンボル化」していったのである[90]。

そして、県や市などの行政機関も角突き保存の必要性を認め、支援を行っていく。新潟県が出資している「新潟県中越大震災復興基金」について、その目的と内容を以下に纏める。

「新潟県中越大震災復興基金」

・名目…「牛の角突き復興支援」

・事業期間…平成 17 年度～平成 21 年度

・事業目的…　新潟県中越大震災で被災し、伝承の危機にさらされている重要無形民俗文化財「牛の角突きの習俗」の復興、保存に要する経費を補助し、文化財保護に資することを目的とする。

・補助内容…①仮設闘牛場の設置（撤去を含む）･･･650 万円/箇所

②仮設闘牛場での「牛の角突き」開催･･･300 万円/年（入場料等収入がある場合は控除した額を補助対象経費とする）

③避難先からの闘牛運搬･･･25 千円/頭・年

④牛舎の設置･･･本牛舎（個別式）200 万円/頭、本牛舎（集合式）65 万円/頭、仮設牛舎 75 万円/施設

⑤仮設牛舎での飼育委託（飼料代等の経常的経費を除く）･･18 万円/頭

⑥闘牛の購入（後継若牛を含む）･･･35 万円/頭

⑦闘牛運搬車輌の購入･･･250 万円/台　　（金額は限度額）

（公益財団法人 新潟県中越大震災復興基金ホームページより引用）

このように、文化財保護の観点から角突き伝承の必要性を認め、幅広い補助を行っている。

つまり、娯楽である角突きを支える存在意義として、昭和期後半より身に付けていた「伝統」という論理が震災後においても作用し続け、角突きは森田がいうところの「メディア、行政が演出した正統な『伝統』」[91]として認識され続けたと考えることができるであろう。その結果、角突きの復興に社会的な意義が認められたのである。

次に、長岡市が山古志の角突きに対して行った「長岡市山古志地域闘牛素牛導入補助金」という事業について、その内容を以下に示す。

「長岡市山古志地域闘牛素牛導入補助金」

・事業目的…この要綱は、闘牛の頭数を維持することにより、山古志地域の習俗である牛の角突きの保護育成を図り、山古志地域の観光の振興に資するため、闘牛素牛を購入することに対し、予算の範囲内において、長岡市山古志地域闘牛素牛導入補助金を交付することについて、必要な事項を定めることを目的とする。

・補助内容…補助金の交付額は、補助対象事業に要する費用の額の 2 分の 1 に相当する額とし、1 の闘牛素牛の購入につき 25 万円を上限とする。

（長岡市山古志地域闘牛素牛導入補助金交付要綱より引用）

この補助が特徴的であるのは、観光振興の資源としての期待が込められている点である。旧山古志村が復興への意思の表明として作成した「山古志復興プラン」においても、中山間地域と都市との新たな連携、都市からの滞在交流型リゾートの形成において、地域文化の体験として角突きを利用していくという旨の記述がある[92]。そして、小千谷の角突きに対しても、小千谷市が策定した「小千谷復興計画」の中で「雪、錦鯉、闘牛を生かした観光振興を進めます。」[93]と記述されており、行政機関から観光資源として期待されていることが伺える。つまり、角突きを支えてきたもう一つの「観光」という論理が、角突き再開の意義としても認められたのである。これは、山古志・小千谷の両角突きが興行化し、担い手たち自身は否定するものの、実態として「観光」という文脈を存続意義として取り込んできたという、史的背景の延長線上に位置づくものと考えられるのである。

以上のように、震災後の角突きにおいても、「伝統」と「観光」という文脈の中で存在意義が見いだされ、社会的に価値あるものとして再開がなされたと考えられるであろう。では、角突きの担い手たち自身は角突きの再開にどのような意義を見出していたのであろうか。次節では、小千谷・山古志の担い手たち、それぞれの現在の語りに注目して考察を進めていく。

第4節　担い手たちにおける角突き再開の意義

まず、山古志と小千谷の担い手たちに、角突き再開の意義に問うと、彼らが最初に語ることは、彼らが「伝統的なるもの」として伝承してきた角突きを守ることの重要性である。このような答えが返ってきた[94]。

A（山古志の牛持ち）:「牛を飼うことで、文化としてここの伝統を残せたら。それがうちらのパワーになる。」

B（小千谷の牛持ち）:「鯉と牛というここの伝統を守っていきたいという思い。でも、鯉（を飼うこと）は経済行為だから（シンボルにはならない）。角突きが復興のシンボルになって、地域復興の核になった。」

（括弧内筆者追記）

つまり、角突きという「伝統」を維持することで、それが地域をまとめる核として機能したという社会的意義を主張する。これは、多くのメディア媒体で語られた「復興物語」に則した語りである。では、彼らは角突きが「地域復興の核になった」という語る根拠にはどのような背景があるのであろうか。これについて、以下の語りに着目する。

C（山古志の牛持ち）:「角突きの仲間は、ジジイになっても付き合っていける素晴らしさがある。ずっと牛飼いでいたい。闘牛会が続いて後の人にもこの伝統を伝えていくことが大事。」

D（小千谷の勢子）:「角突きを守ったことで、地域に残った人もたくさんいる。牛を取り巻く縁で繋がる関係を守ることが大切。」

つまり、彼らは角突きが伝承され続けることによって、担い手たちの関係性が保たれ、それが地域に人を繋ぎとめているという機能を語る。確かに、震災後東山地区においては309戸あった戸数が109戸という半数以下に減少しているのに対し、角突き牛を飼っていた家の戸数は25戸の内、5戸が減っただけである。そして、小千谷を離れた元牛持ちが、震災をきっかけとしてもう一度牛を持ちたいと考えるようになり、小千谷に帰ってきた例もある。山古志においても、全体の帰村割合が9割程度と高かったこともあるが、担い手たちはほとんどが山古志に残っている。震災という、これまで築き上げてきた人間関係が瓦解してしまいかねない状況において、角突きを通して形成された人間関係が、地域に人を繋ぎとめる役割を果たしていた側面は否定できないであろう。

そして、担い手たちはこの人間関係を失いたくないと語る。その関係性は牛持ちと勢子という強い信頼関係の中でだけ構築されるのではない。角突き大会当日における交流はもちろん、取組審議委員会での話し合いや、若手を中心に定期的に集合して、過去の取り組みのビデオを見ながら行われる宴会、そして、角突きを見に来る観客との関わり[95]など、さまざまな場面で人間関係の構築が行われている。このような人間関係を通じて地域の紐帯が強化されるという機能を彼らが知覚し、それを角突き再開の意義として語ることは理にかなっていることであり、彼らが「伝統」を守りたいと述べる根拠になっていたと思われる。

しかし、形式的な聞き取りが終わった後の、雑談の中での彼らの語りは変化をみせるのである。それは、次のようなものである。

A :「でもこういうのは、落ち着いてくるとともに、美談になってきたんだよな。」

B :「意義っていうのも大事だけど、それありきじゃなくて、角突きが楽しいんだからみんな続けたんだろうな。

C :「むかしっから『牛は馬鹿が飼って、利口がみる』っていうんだ。そんな偉いもんじゃないんだ。」

A は、角突き再開の意義として自らが語った「『伝統』を残していくこと」ということを「美談になっていく」という表現し、この言説が徐々に作られていったということをほのめかす。また、C は「牛は馬鹿が飼って、利口がみる」と自らを卑下するような言葉を述べる。ここには、伝統を守る当事者としての矜持は感じられない。さらに、B は「角突きが復興のシンボルとなり、地域の核になる」ことを意義として語っていたが、「意義ありきではない」という言葉を使って自らの主張を覆し、角突きが「楽しい」から続けられたということを示唆したのである。そして、この B の語りを裏付けるように、ある山古志の牛持ちは、「伝統」を保存するために再開したという言説を真っ向から否定し、角突きが楽しみであるから再開したという意見を語るのである。

> 「皆さんがよく、伝統と文化を引き継ぐために、こういう状況の中でもやるんだねって、こういう言い方を言ってくれる。でも本当は、何も我々が伝統と文化を守ろうなんて高尚な思いは一切ないと。ただ、今までみんなで楽しんできたんだから、それをやりたいと。そういう思いなんです。裏を返せば、伝統と文化がうちらを支える大きな力なのかなと。」[96]

彼は、担い手たちに「伝統」を守るという意識は一切なく、むしろ「伝統」という社会的に認められた価値が、娯楽としての角突きを支えてくれたと逆説的に述べるのである。もちろん、担い手たちが角突き再開に求める意義は、それぞれ異なっていたと考えられるため、担い手の中に「伝統」を守る気は一切無かったという彼の意見を鵜呑みにすることはできない。しかし、担い手たちが「伝統」の継承のために角突きを存続させるという、一義的な解釈において復興を遂げたわけではないということは明らかである。そして、角突き再開に際し、「娯楽としての楽しみを復活させる」という願望が彼らの中にあったのではないかということが示唆される。

その証左として、前章で言及した、担い手たちによる牛舎の変容に関する語りにおいて、彼らがそこで最も気にかけていることは「娯楽」としての楽しみをいかに担保するかということであったことが挙げられる。さらに、多くの担い手たちが角突きの再開に当たり、本当に角突きをやっていいものかという「後ろめたさ」を感じていたという。つまり、生活もままならない状況の中で「娯楽」である角突きを再開させることに少なからず抵抗を感じていたのではないだろうか。その抵抗を打ち払うように、彼らは角突きを楽しみながらも、角突きに向けられた伝統文化の伝承や地域振興などの期待に応えるものとして、戦略的に角突きを「必要不可欠な文化」として位置付けていたと考えられるのである。また、先に引用した語りを行った A、B、C に関しても、その語りに変容がみられたことは、形

式的な聞き取りの間は、外部からのまなざしである筆者に対し、角突き復興の社会的意義を強調して語ることで、復活されるべき「伝統」として角突きを価値付けようとした試みによると推察される。

次に、角突きが行政から「観光資源」として期待されたことについて、担い手たちはどのような認識であるのかを考察していく。角突きにおける「観光化」という事象は、第2章で述べたように、担い手たちは否定し続けてきたものである。そのため、震災後においても、行政から「観光資源」として期待をされたのにも関わらず、彼らから角突きが「観光化」したという語りは一切聞くことができない。しかし、彼らも「復興のシンボル」とされた角突きに、より大きな注目が集まっていることは否定しない。山古志の担い手はこう語った。

> 「仮設に暮らしてても電気代でも、風呂代でも節約してでもやっていこうという、つらい状況の中でも、角突きをやることによって強い誇りを持って生きていこうという。そういう思いがあったからこそ、震災があって多くの目が山古志というものを見ててくれるのかなって。観ていてくれている人たちっていうのは、ああいう震災の中から、あそこまで頑張ってきたんだからっていう心証のなるっていうかね。」[97]

実際に、角突き再開の初年度は、山古志・小千谷双方の角突きに大勢の観客が集まり、通年の観客数で震災以前の約2倍ほどの観客動員があった[98]。そして、今後も多くの人に角突きを見てもらいたいと担い手たちは考えている。これは、山古志・小千谷に共通した語りであり、その理由に関しても同じような説明がなされる。その典型が以下のような語りである。

> 「この地域は生きていくためには厳しい環境。ここに住んで、ここで生きていくためには、ここの金や、ここで取れるものだけでは生きてらんねえわけです。外からの声に目を向けなかったらだめだ。これまでも、広い世界に目を向けながらやってきた。この地域に留まる考えだけではないと。ここでやっていることは我々にとっては娯楽だけど、これは地域外に対することなんだということ。」[99]

つまり、中山間地域という厳しい環境の中で生きていくためには、地域外との繋がりを保っていかなければいけないという危機感が彼らの中には存在する。その手段が鯉であり、角突きなのである。震災を契機に大きな注目を浴びた角突きは、その役割を十分に果たしているといえるであろう。震災後は、ファミリー層を中心に地域外からの観客が増え、そ

の年齢層も若くなっているという。この状況に小千谷の担い手は「今が旬かもしれない」と述べ、これからの継続した集客への努力が必要だと警鐘を鳴らす。そして、牛持ちたちは行政からの補助があっても、個人としては赤字になってしまっているのが現状を改善するために、少しでも入場料収入を増やして、経済的負担を軽減したいという思惑も覗かせる。すなわち、彼らは震災以前と同様に、角突きの「観光化」を認めないながらも、角突きを観客の目に耐えうるものにするために、尽力をしているのである。

第 5 節　本章のまとめ

昭和期の消滅と再開のプロセスにおいて、「伝統」と「観光」という論理を手に入れ、存続意義を手に入れた角突きは、震災からの復興過程においても、メディアや行政から伝統の継承や、地域振興といった期待が向けられた。そして担い手たちは、それらの期待に応える機能を有するものとして角突きを語っていた。

また、彼らの語りから、確かに角突き再開が地域の紐帯を強化するという機能を知覚していることを指摘した。これは、第 1 章で言及したこれまでの研究において指摘されてきたように､伝統行事が同一のアイデンティティを持つ行事参加者の間に連帯感をもたらし、集団の統合に貢献したというように考えられる。

しかし、彼らの本音は社会的意義ありきで角突きを再開させたのではなく、楽しみの追及、つまり娯楽としての角突きを失いたくなかったというものであったということを指摘し、その娯楽を彼らは外部との繋がりを保つための手段として捉えていることを明らかにした。

---

71 2009 年消防庁発行の資料を参照。
72 亀本 2005,p3
73 橋詰 2012,p101
74 ibid.,p102
75 ibid.,p102
76 ibid.,p100
77 ibid.,p100
78 ibid.,p100
79 新潟県防災局危機対策課ホームページ参照
80 公益財団法人 新潟県中越大震災復興基金　ホームページ参照
81 2012 年 8 月 3 日、筆者聞き取り
82 同上
83 同上
84 菅 2013 pp.29-30
85 BS 日テレで放映された「キズナのチカラ 震災復興のシンボル『小千谷闘牛』“伝説の父”

が息子に与えた試練と絆！」などがある。

[86] ダイドードリンコスペシャル 牛の角突き-山古志に伝わる千年の熱きこころ- NST(新潟総合テレビ) 2009 年 11 月 7 日

[87] 宮本は、この被災住民たちが地域や自分たちについて語りなおすことを通して、復興の物語を紡ぐ形を「物語復興」と定義している。復興を物語として捉えることで、地域やそこに生きる人々を、静的で受動的でもう変化は望まれないものと見るのではなく、動的で主体的でさまざまな可能性に満ちたものとしてみることができるとしている。また、宮本は山古志・小千谷のような中山間地域における被災では、復興に際し、高齢化などの地域に山積する課題が大きすぎるため、悲観的な地域像からひとまず視線をそらし、地域行事や畑づくりなどから成功体験を得ることで、復興の活力とする「軸ずらし」が行われていることを指摘している。角突きはまさに「軸ずらし」の対象になっていたと考えられる。

[88] 中越地震特別取材班 2007,p92

[89] 里村 2006,p29

[90] 菅 2012,p68

[91] 森田 2003,p98

[92] 山古志村 2005,p33

[93] 小千谷市 2005,p17

[94] ここでの担い手たちの語りは、2013 年 9 月 17 日に行った、筆者による聞き取りによるものである。

[95] 小千谷においては、観光客が角突き見たさに東山に通い、見るだけでは飽き足らず、勢子や牛持ちとして角突きの担い手となってしまう「元・観光客」の会員が近年増加しつつある。

[96] 2013 年 9 月 16 日、筆者聞き取り

[97] 2012 年 8 月 3 日、筆者聞き取り

[98] 日本財団発行の『山古志・小千谷における二十村郷闘牛の復興 事業報告書』参照

[99] 2012 年 8 月 3 日、筆者聞き取り

第 5 章　結論

本研究は、中越大震災において被災した牛の角突きを事例に、震災後における変容と当該行事の再開に与えられた意義を明らかにしようとしてきた。本研究で行われた検証が不十分であることを承知で、これまでの本論文を統括し、考察をしていく。

まず、本論文で得られた知見をまとめていく。第 2 章では、先行研究を検討することで、角突きを通時的に理解することを試みた。角突きは二十村郷における数少ない娯楽として楽しまれてきた。しかし、二十村郷を巡る経済の論理や、行政による風俗統制によって、消滅と再開を繰り返すことになった。その過程で角突きは「伝統」と「観光」という論理を身に付けることによって、行事存続の正当性を確保したことについて言及した。つまり、これまでの先行研究で指摘されていたように、民俗行事が存続のために「観光化」し、「伝統性」が強調されるという動態が、角突きにおいても起きているということを確認した。そして、山古志においては「伝統」を変容させていくことで観客を楽しませようとするのに対し、小千谷は「伝統」をそのまま観客に提供しようとする志向の違いが、角突きの「観光化」の過程で生まれたことを指摘した。そしてこの志向の違いから、二十村郷の角突きが、「伝統」を変容させていくことを厭わない山古志の角突きと、「伝統」を守ることに固執する小千谷の角突きという、二つの角突きへと分節化したことを明らかにした。

第 3 章では、震災後における角突きの変容について、角突き牛、闘牛場、角突きをめぐる共同体、牛舎という 4 つの項目に分類し、分析を試みた。

角突き牛においては、山古志が地域の復興を象徴するような四股名を付けているのに対し、小千谷は、家の屋号を四股名にするというこれまでの慣習を守っていた。闘牛場に関しては、両地域において、震災の記憶を想起させるようなモニュメントが設置されていた。この変容は小千谷の担い手が唯一積極的に語る変容であり、彼らはこの変容が角突きの「伝統」を壊す可能性が無いものと捉えていたと考察した。角突きをめぐる共同体においては、山古志が角突きの統括団体を再編成し、新たな外部団体も大会当日の運営として受け入れているのに対し、小千谷はこれまでの統括組織のまま角突きを再開させている。最後に牛舎に関する変容であるが、山古志は新たに共同牛舎方式を採用した。これにより、個人で牛を飼うことによって、自分を投影させるものとして牛を戦わせるという、個人の娯楽という側面は後景に押しやられ、角突きの面白さが、観客にいい角突きをいかに見てもらうかという全体性のもとで見出されるようになった。小千谷はこれまでの個人牛舎形式を守ることに強いこだわりを持っており、これまでの個人としての娯楽を守るとともに、牛を家で飼うという文化が角突きの担い手を再生産するという機能を的確に捉え、それを震災後も継続して成功をさせていることが明らかとなった。これらを俯瞰すると、「伝統」を変

容させることに寛容であった山古志の角突きが、すべての項目において変容をしているのに対し、「伝統」を維持していくことを重要視した小千谷の角突きは、闘牛場の変容だけに留まるという、対照的な様相が浮き彫りとなった。

第 4 章では、中越大震災における角突きの復興過程を整理し、担い手たちの生活再建がままならない状況の中でも、双方の角突きが早急に再開への合意形成がなされ、翌年には角突きが再開されていることについて言及した。この復活した角突きは「復興のシンボル」と表象され、多くのメディアから、地域住民が震災を乗り越えて継承している「伝統」、つまり、メディアが演出した正統な「伝統」として注目されるようになる。そして、担い手たちもそれに応えるように、角突きの復活は「伝統」を守るという社会的意義があるものと喧伝をしていることについて指摘した。また、行政からも「伝統」と「観光」という文脈の中で角突き再開への意義が見いだされた。担い手たちからの聞き取りにおいても、「伝統」を守ることの重要性が語られ、その根拠として、角突きが伝承され続けることによって担い手たちの関係性が保たれ、それが「地域に人を繋ぎとめる機能」として語られる。つまり、彼らが震災からの再開過程において経験した事象から、先行研究で指摘されているように、民俗行事が地域の紐帯を強化するという機能を担っていることを知覚していることが明らかとなった。しかし、彼らの語りの曖昧さや、他の担い手の証言により、彼らが角突きを復興させた意義の根底には、「娯楽」に対する希求があったことを指摘した。つまり、彼らは、災害からの復興過程において、「娯楽」を再開させることに抵抗を感じ、それを打ち消すために、外部からのまなざしに対しては、戦略的に角突きの社会的意義を語っていたということが考察された。

以上のことを踏まえ、本研究の目的に照らし合わせて考察していく。角突きの変容は、①存続のために、やむを得ず変容させたもの、②外部の目に耐えうるようにするために積極的に変容させたもの、③変容させなかったものと 3 項目に分けられる。山古志の角突きにおいては、角突きをめぐる共同体と、牛舎における変容が①に該当し、角突き牛と闘牛場の変容が②に該当した。これはつまり、山古志の角突きは、震災による消滅危機を何とか回避し、そして「伝統」を積極的に変容させるという態度から、その存続のために角突きを再解釈し、新たな娯楽の意味をも見出しながら、その形態を変化させていったということが考察される。

小千谷の角突きにおいては、闘牛場の変容が②に該当し、角突き牛、角突きをめぐる共同体、牛舎における変容が③に該当した。つまり、小千谷の角突きは、震災に見舞われても、消滅が危惧されるような状況にはならなかったと考えられる。また、闘牛場の変容は「伝統」に関わることが無かったという考察を加えると、彼らは一貫して角突きの「伝統」を守り続けたということがわかる。これは、小千谷の担い手が、「伝統」を守ることで、外

部からの評価を得られるということを認識し、闘牛が震災以前から保ってきた「伝統」を維持するという態度を示し続けたものと理解することができる。

そして、山古志、小千谷の担い手たちが角突きを変容させる、またはさせないことによって守ろうとしたものは、他でもない「娯楽」への希求であったことが明らかになった。

参考文献リスト

日本語

石川菜央 2004「宇和島地方における闘牛の存続要因 ： 伝統行事の担い手に注目して」『地理学評論』77(14), 957-976

石川菜央 2009「全国闘牛サミットの開催地における意義―岩手県久慈市の「第 12 回全国闘牛サミット」を事例に」 『広島大学総合博物館研究報告』 (1), 45-51,

E・M・ブルーナー 2007『観光と文化』（安村克紀訳）学文社

愛媛県教育委員会 2000『南予地方の牛の突きあい習俗調査報告書』1-90 愛媛県教育委員会

E・ホブズボウム 1992『創られた伝統』（前川啓治訳）紀伊國屋書店

遠城明雄 1992「都市空間における『共同性』とその変容-1910～1930 年代の福岡市博多部」『人文地理』44,341-365

大矢根 淳 2011 「被災地復興における優位な言説について: '生活再建≒地域アイデンティティ再構築'に対峙する災害社会学の視角」『専修人間科学論集. 社会学篇』1, 25-36

岡田浩樹 2012 「文化人類学からの視点」 東北大学東北アジア研究センターシンポジウム 民俗芸能と祭礼からみた地域復興 発表資料

小千谷市 1967『小千谷市史 下巻』小千谷市史編修委員会 編

小千谷市 2005『小千谷復興計画』

越智祐子 2005「まちの復興のメルクマールとしての震災モニュメント形成 ： 地理情報システムを用いた形成要因の分析」『地域安全学会論文集』 (7), 79-86

亀本和彦 2005「新潟県中越地震の被災とそれからの復興」『調査と情報』467

木内明 2010「民俗行事の消滅と共同体の変容--北海道夕張郡栗山町の盤持大会をめぐる地域社会の変容」『スポーツ人類学研究』12, 75-94

木村周平 2005「災害の人類学的研究に向けて」『文化人類学』70(3), 399-409

曲亭馬琴 1814『南総里見八犬伝』

桑原季雄 2007「東アジアにおける闘牛と「周辺-周辺」ネットワークの形成」『南太平洋研究』 27(2), 53-72

里村洋子 2006『動き出す山古志の衆　中越地震からの復興』アートヴィレッジ

消防庁 2009 「平成 16 年(2004 年)新潟県中越地震（確定報）」

菅豊 2013『「新しい野の学問」の時代へ―知識生産と社会実践をつなぐために』岩波書店

須藤護 2007「新潟県旧山古志村・棚田と農耕生活の記録」『国際文化研究』11,129-161

曽我亨 1991「徳之島における闘牛の飼育と、その分類・名称・売買の分析―人々はいかに闘牛を楽しんでいるか」『日本民俗学』188,1-48

中越地震特別取材班 2007『やまこし復興―希望をつないだ国道 291 号の 680 日』小学館クリエイティブ

中越防災安全推進機構 2011 『中越から東日本へ　震災復興とその未来』 新潟日報事業社

中村琢 2012「『伝統』をつなぐこと ： 等覚寺の松会(まつえ)の伝承についての一考察」『宗教研究』86(3), 577-601

二十村郷牛の角突きの習俗保存会編 1982『二十村郷　牛の角突きの習俗』山古志村教育委員会

日本財団 2006『山古志・小千谷における二十村郷闘牛の復興 事業報告書』 日本財団図書館

橋詰登 2012「 新潟県中越地震（旧山古志村等）」農林水産研究所編『過去の復興事例等の分析による東日本大震災復興への示唆-農漁業の再編と集落コミュニティの再生に向けて』

橋本裕之 1996「保存と観光のはざまで―民俗芸能の現在」山下晋司編『観光人類学』178-188

林勲男 2005 「災害 ： 文化人類学からのアプローチ」『民博通信』110, 2-5

林勲男 2011「民俗芸能の被災と復興にむけて」『季刊民族学』138,20-29

東照雄 2007「中越地震がニシキゴイ養殖生産に与えた影響」『日本水産学会誌』73(3), 529-532

広井忠男 1998『日本の闘牛』高志書院

広井忠男 1999「<研究ノート>国指定重要無形民俗文化財越後の『牛の角突き』と隠岐の『牛突き』の習俗」『新潟史学』43, 37-51

宮本匠 2007 「『軸ずらし』と『物語復興』」『復興コミュニティ論入門』（浦野正樹編）26
森田三郎 1990『祭りの文化人類学』世界思想社
森田真也 2003「フォークロリズムとツーリズム―民俗学における観光研究」『日本民俗学』236,92-102
谷沢明 2009「宮本常一の観光文化論」『愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告』(4), 1-16
山古志村 1987『山古志村史．民俗』山古志村史編集委員会編
山古志村 2005『山古志復興プラン　帰ろう山古志へ』
山下晋司 1999『バリ観光人類学のレッスン』東京大学出版会
渡邉敬逸 2009「『文化』と『経済』のあいだに―牛の角突きの近現代」菅豊編 『人と動物の日本史.3－動物と現代社会』 吉川弘文館

外国語

A.Oliver-Smith.1996 “Anthropological Research on Hazards and Disasters” In *Journal of Annual Review of Anthropology* 25,303-328

URL

小千谷闘牛会ホームページ
http://www.tsunotsuki.com/
小千谷闘牛北斗会ホームページ
http://www.geocities.co.jp/SilkRoad-Oasis/2062/
公益財団法人 新潟県中越大震災復興基金ホームページ
http://www.chuetsu-fukkoukikin.jp/
総務省消防庁ホームページ
http://www.fdma.go.jp/bn/2009/detail/581.html
新潟県防災局危機対策課ホームページ
http://www.pref.niigata.lg.jp/shinsaifukkoushien/1196007343978.html
山古志木籠ふるさと会ホームページ
http://yamakoshikogomo.com/

新聞

新潟日報社 2005 年 5 月 5 日

新潟日報社 2006 年 5 月 3 日

新潟日報社 2006 年 8 月 4 日

新潟日報社 2009 年 3 月 13 日

テレビ番組

BS 日テレ 2010 年 11 月 18 日「キズナのチカラ『震災復興のシンボル「小千谷闘牛」“伝説の父”が息子に与えた試練と絆！』」

新潟総合テレビ 2009 年 11 月 7 日「ダイドードリンコスペシャル 牛の角突き-山古志に伝わる千年の熱きこころ-」

図・写真リスト

図

地図１　二十村郷の地図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

写真

写真１　角突きの様子・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
写真２　山古志闘牛場のメッセージボード・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
写真３　被災状況の展示・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
写真４　小千谷のみまもり岩・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
写真５　山古志の共同牛舎・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30
写真６　小千谷の個人牛舎・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30